
バカと独眼と召喚獣

WING

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと独眼と召喚獣

【Nコード】

N8015P

【作者名】

WING

【あらすじ】

戦国武将、伊達正宗の血を引く主人公が、文月学園で、親友の吉井明久、坂本雄二達と共に、トラブルに巻き込まれながらも、打倒、Aクラスを目指し、大奮闘！！（基本、原作沿いなので、すぐに読めると思います。）

プロローグ（前書き）

どうも、作者のwingです。今回、初めて小説を書いて投稿しました。

ドがつく素人ですが、これから連載していくつもりなので、今後、よろしくお願ひします！！（作者は文才がないので、とても駄文です）

プロローグ

俺がこの文月学園に入学して早くも二年がたった。

本来なら普通の生徒は、この前あった振り分け試験の結果をドキドキしながら待っているはずだ。

しかし、少なくとも俺は違うなぜかというと、

「あつ、マサじゃないか。おはよう。」

と、うしろから声をかけられた。俺は振り返り

「ん？なんだ、明久か、おはよう。」

と、声をかけてきた男子生徒、『吉井明久』にあいさつした。

明久とは中学校からの付き合いで、今では親友の間柄だ。

そして、俺は明久に、この前の振り分け試験のことについて聞いた。

「ところで明久、振り分け試験はどうだった？」

「実は、僕今回の試験とても自信があるんだ。」

「ほう、どれくらい取れたんだ？」

「んーと・・・十問に一問はとけたかな？」

「・・・・・・・・・・。」

俺は心の中で『こいつはバカだったんだな・・・』と思い出したため息をはいた。

「どうしたの 마사？」

そんな俺の気持ちも分からず、明久が顔をのぞきこんできた。

「なんでもない……。」

「そうならいいけど、マサはどうなの？」

と、明久が俺の試験の結果について聞いてきた。

「ん？俺は……。」

「遅いぞ、吉井、伊達。」

と、俺が言いかけた時、別の声が割り込んできた。

気が付くと、いつの間にか校門の前に来ていたようだ。そして俺達の目の前には、

「うげ、鉄人。」

「今、二人して俺を鉄人と言っただろ。」

と、ジト目で俺と明久を見る、鉄人こと西村先生が立っていた。

この人に目をつけられるとロクなことがない。

ちなみに、鉄人と言う名前の由来は趣味のトリアスロンからきている。

「すみません。」

「そんな事より先に言うことがあるだろうが。」

「えーっと……今日も肌が黒いですね。」

「えーっと……今日もマツチヨなうえに、よく怒号が響きますね。」

「お前らは遅刻の謝罪より俺の肌の黒さや筋肉、怒号の事を気にするののか？」

「そつちでしたか。すみません、まだ少し寝ぼけていて。」

「そうなんです。すみません。」

と俺と明久が言うと、西村先生は呆れ口調で、

「まったく。ほら、受け取れ。」

と、明久に封筒を渡した。

「あれ？マサには渡さないんですか？」

「ああ、伊達は試験当日、家の用事で試験を受けられなかったからFクラス行きは確定なんだ。」

「そうだったんだ。残念だったね、マサならAクラスへ行けたのに……。」

と、残念そうに明久は言ってきた。

しかし、俺はあまり気にしていないので、残念だとは思っていない。

「気にするな明久。ところで、お前はどこなんだ？」

「えーっと、ちょっと待って。」

と、明久が封筒を開けようとした時、西村先生は思い出したように明久に言った。

「おっと、そうだ吉井、お前に言いたい事がある。」

「なんですか？」

すると先生は語りかけるように言った。

「俺はお前を一年見て『こいつはバカなんじゃないのか？』と思っていたんだが、

今回の試験でその疑いは晴れたんだ。」

「その疑いが晴れてよかったですよ。」

そう言っつて明久は封筒を開け中の紙を取り出した。すると大きな文字でこうかかれていた、

『吉井明久・・・Fクラス』

「吉井、お前はバカだ。」

まったくだ、と思いつつ俺と明久の最低クラス生活がスタートした。

プロローグ（後書き）

誤字、脱字がありましたら、感想にて願います。
この小説は不定期更新なので、ご了承ください。

オリジナル主人公プロフィール

名前 伊達将人（だてまさと）

誕生日 11月3日

性別 男

性格 普段は、真面目で人当たりの良い友達思いの優しい優等生だがある事をされると鉄人さえ手がつけられなくなり、（一説には、

別の人格がある。と思われくらいに）別人のように凶暴になる。

容姿 ヘアカラーは水色、髪は長髪で背中まで伸ばして首の後ろで縛っている。前髪は、まゆ毛に掛かるくらい。

すらりとした体型で精悍な顔つきなので女子に人気が高い。

数年前に事故で左目を失明していつも眼帯をしている。失明した左目の状態は親友の明久ですら知らず、一部の家族しか知る人がいない。

趣味 日本古来の武術をすることで、剣道、柔道、空手の

腕前はかなりのもの。そのため、雄二並に体を鍛えてある。

あと、意外にも明久ほどでもないが料理もする。

学力 Aクラス。過去に学年主席に三回なっている。

霧島翔子とは一年生の時からのライバル同士でもありお互いに仲の良い友達でもある。

得意科目 日本史、世界史、古典、現国、数学、英語 平均450

点程

(日本史だけ教師レベルだが、他はAクラスレベル)

苦手科目 保健体育、物理、化学 平均200点〜250点ぐらい

召喚獣 本人を二頭身にしてデフォルメした感じ。

伊達政宗のような兜をまとい二刀流。

腕輪 ????

好きなこと・もの 他人のために一生懸命になる人。目標に向かって
頑張る人。かわいいものなど・・・

嫌いなこと・もの 一生懸命に頑張る人を笑う人、邪魔をする人
卑怯なことばかりする人。同性愛者など・・・

その他 精悍な顔つき、人当たりが良く優しい、頭が良いなど
非の打ち所がないため、女子からの告白が多いが、全て
断っている。しかし、押しに少し弱い。

(理由は、「俺は、昔から好きな人がいます。だから、あなた
の彼女にはなれません。」だそうです。) (

そのため、よくFFF団に襲われるが、毎回返り討ちに
している。ただし明久、ムツツリー二だけ手加減している
その強さ、容姿から、周りからは『独眼』と言う名前で
よばれることもある。

いつも失明した左目を気にして眼帯を外すことを
とても拒否する。

そのため、水泳などのような眼帯を外さないといけない遊び
行事は必ず見学している。

オリジナル主人公プロフィール（後書き）

すみません！！今更ながら、少し設定を変えさせてもらいました。
既に読んでしまった方、大変申し訳ありません。

試召戦争編第1問（前書き）

問題

『調理の為に火かける鍋を製作する際、軽いマグネシウムを材料に選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と、マグネシウムの代わり用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく反応する為危険であるという点』

合金例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄では駄目と言う引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

伊達将人の答え

『問題点・・・火にかけると大変危険。』

合金例・・・鉄』

教師のコメント

惜しいですね。合金なので、鉄だと間違いです。苦手科目でも、結構いい成績なのですから、もう少し頑張りましょう。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金例・・・未来合金(すごく強い)』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

試召戦争編第1問

「Fクラスかぁ・・・今回のテストは自信あったのに。」

「仕方ないだろ十問に一問しか解けないんだから当然だろう。」

と、ガツクリと肩を落とす明久と話しながら、俺達は三階に来た。すると、目の前に現れたのは、

「・・・何だろう、このばかデカイ教室は。」

「これがAクラスなのか？」

と、普通の教室の五倍はあるくらいの広さを持つAクラスだった。

俺達は、足を止めて窓からクラスの様子を覗いてみた。

すると、中では自己紹介中のように、巨大なプラズマディスプレイに担当の教師の名前が表示されていた。

「皆さん進級おめでとございます。私はこのクラス担当のたかはし高橋洋子です。よろしくお願ひします。」

と、その教師・・・高橋先生は礼儀正しく挨拶していた。

「いいな、高橋先生が担当なんて・・・。」

「そっか、マサは高橋先生を尊敬しているもんね。」

と、俺が羨ましがっている時、先生は設備の事について話し始めた。

「設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備はありませんか？」

と、高校生が普通に授業を受けるには贅沢過ぎることを言い、俺と明久は耳を疑った。

「嘘だよね・・・いくらなんでも贅沢過ぎない？」

「だが、エリートしか集まらないんだから仕方ないだろ。それに、もしFクラスの設備がひどいなら奪ってしまえばいい。」

明久が驚き、俺が危険？な事を言っているとき、先生は、クラスの代表を紹介していた。

「では、代表の霧島翔子さん、前に来てください。」

「・・・はい。」

と、呼ばれて出てきたのは、俺のライバルで、友達でもある霧島翔子だった。

「翔子か・・・なら、今年はアイツが主席か。」

「ねえ、マサと霧島さんはどんな関係なの？」

「俺と翔子の関係・・・？翔子とは友達だよ。」

「羨ましい!!」

「そうか？別にイチャイチャするほど仲は良くねえぞ。」

「それでも羨ましい！！あの霧島さんだよ？頭も良いし、綺麗だし友達
になれただけでも羨ましいよ。」

「まあ、確かに周りから見れば羨ましいかもな？」

そんな、俺と翔子の関係の話で盛り上がっていると、翔子はクラス全員

の視線を気にせず淡々と自己紹介を始めた。

「・・・霧島翔子です。よろしく願います。」

「相変わらずだな、あの暗さは。」

と、俺が小さく呟いた時、先生が最後に

「では皆さん、これから一年、霧島さんと協力して勉学に励んでください。」

あと、これから始まる『戦争』ではどこにも負けないで下さい。」

と、結びの言葉を言ったので、

「おっと、俺達も急ぐぞ。」

「あつ、待ってよー！」

小走りしながらFクラスへと急いだ。

試召戦争編第1問（後書き）

本編第一問目です。これから、どんどん話を進めて行きます。

第2問目（前書き）

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『得意なことでも失敗してしまうこと』

『悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希、伊達将人の答え

『弘法も筆の誤り』

『泣きつ面に蜂』

『河童の川流れ』

『踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。さすがですね。

他にも、『猿も木から落ちる』、『弱り目に祟り目』など
がありますね。

土屋康太の答え

『弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか？

第2問目

俺と明久は二年F組のプレートのある教室の前で躊躇していた。
なぜなら……

「これがFクラス？廃屋みたいだね……。」

「Aクラスとの差が酷過ぎるな……。」

目の前の教室は、明久が言ったように廃屋に近い外見だったからだ。
俺なんか『これ、教室？』と思っただけ。

しかし、いつまでも外にいても仕方ないので、

「とにかく中にはいるぞ。明久。」

「そうだね……。」

と、意を決してドアを開けると、

「早く座れ、このウジ虫野・郎……ど……も？」

と、いきなり罵倒が飛んできた。

しかし、俺を見たとたん急速に言葉が小さくなり、

「何で、伊達がいる！お前はAクラスだろ！！。」

罵倒を言った奴……坂本雄二が驚いた様子で聞いてきた。

そりゃあ、俺の成績を知っている人なら驚くだろうな。

そんなことより……

「雄二、お前、俺をウジ虫呼ばわりしたな・・・覚悟はできてんのだろうな・・・!!」

「ま、待て！それはお前の後ろにいる奴のことで・・・」

「だがお前、野郎共って言ったよな。」

「それは誤解だ！すまん。だから許して・・・ぎゃああああああああああ。」

そんな事で許す俺じゃない。雄二は見事に俺にボコボコにされた。

そして雄二をボコツた後、俺は中の様子を見た。

「しかし、外がひどいとなかもひどいな・・・」

「だよな。綿の入っていない座布団、足の折れたちゃぶ台、隙間風の入る教室。Aクラスとは大違いだね。」

「んで、俺がこのクラスの代表だ。」

と、いつの間にか復活した雄二が言った。つか、あれだけボコツたのに復活するの早っ!!

「ちょっと、通らせてもらえますか。HRホームルームを始めますので。」

と、背後から覇気のない声が聞こえてきた。後ろには、冴えない風体の教師らしき男性が立っていた。

「はい、分かりました。」

「うーっす。」

俺と明久と雄二はそれぞれ返事をして空いている席？に座った。ちなみに、俺の席は明久の後ろ、つまり、列の最後尾だ。

そして先生は壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。Fクラス担当の福原慎ふくはらしんです。よろしく願います。」

福原先生はヒビの入った黒板に名前を書こうとして、止めた。チヨークすらまともになにかよー！！

「全員、ちゃぶ台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい。」

不備があればって、不備しかねえよ！！と心の中でツッコみつつ、周り

の反応を見てみると、色々と不備を言う生徒もいる様だ。先生は生徒の

要求に丁寧に返しているが、「我慢して下さい」か、「自分で何とかして下さい」の二択しかない。

「では、自己紹介を始めましょう。廊下側の人からお願いします。」

ともあれ、あらかた出尽くしたら自己紹介がはじまった。

第2問目（後書き）

今回、あまりにも長いので自己紹介の前で区切らせて頂きました。
なるべく早く更新するつもりです。
誤字、脱字がありましたら感想にて。感想をどんどん送ってください。
い。

続・2問目(前書き)

前回の続きです。

学校が始まってしまったので、更新はかなり遅くなってしまつかも・

・

なるべく、早く更新するので読んでくださる方、すみません。

続・2問目

自己紹介が始まり、廊下側の生徒が一人立った。見覚えのあるその生徒は名前を言った。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

独特の言葉使いと女子と間違えそうな感じは、秀吉か。相変わらずかわいいな……。しかし、本人は女子として扱われるのを嫌うので俺は女子としては見ていない。

「……………土屋康太。」

そんな風に見ている間に次の人が終わった。って、早っ！この暗さ、小柄な体は紛れもない康太だな。しかし、知り合えばかりだな。何でこんなに多いんだろうか？

このクラスに女子は居ないんだな……。と思っていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。ん？この声、まさか……

「育ちはドイツで、趣味は……吉井明久を殴ることです」

やはりな。こんな趣味を持つ女子は少なくとも一人しかいない。

「はろはろー」

その声の主は、笑顔で明久に挨拶していた。

「……………あう。し、島田さん。」

明久は怯えながら、その女子の名前を言った。

島田美波、明久の天敵だ。ドンマイ明久。

「明久、震えてないで自己紹介してこいよ。」

「あ、うん。」

そう言っつて明久は壇上上がり自己紹介を始めた。

「えーつと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね。」

「「「ダーリン!!!」」」

トイレに行きたくなるほどの不愉快な大合唱。止めてくれ・・・

「・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

明久も同じことを思ったのか、すぐに訂正した。気持ち悪い

「マサ、ごめん。次だから早くしてきたら?」

ちゃぶ台に突っ伏している俺を見て明久は戻ってくるなり、

俺に謝った。二度とするなよ。

「それじゃあ、行こうかな・・・」

俺が立とうとした時、ガラリとドアが開き一人の生徒が入ってきた

「あの、遅れて、すみません。」

「丁度いいです。今自己紹介をしているので姫路さんもお願ひします」

「あの、姫路瑞希です。よろしくお願ひします。」

その生徒・・・姫路瑞希はクラス全員に自己紹介をした。

第3問(前書き)

どうも。作者のWINGです！ちょっと遅い更新です。
今回、ちょっと変わった人が最後に少しだけ出てきます。

第3問

「何でここに居るんですか？」
Fクラス

瑞希さんに最初にかけられた言葉はこれだった。

大変、失礼なんだが、まあ仕方ないな。俺も驚いたからな……。

「その……試験の時に高熱を出してしまいました……。」

おずおずしながら言った理由に全員、『なるほど』と頷いた。

途中退席は無得点扱いになるんだったんだっけ。惜しいことをしたな。

そんな、瑞希さんの言い分を聞いて、クラス内からも言い分が出る。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったよな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて……。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「「彼女だとおお！！ブチ殺せ！！！」」

「ごめんなさい！嘘です！！！」

想像以上にバカだらけだな・・・一年間、大丈夫なのか？

「で、では、よろしくお願いします。」

自己紹介を終えた瑞希さんは逃げるように、明久と雄二な間の席つまり、俺の右斜め前の席に座った。

「き、緊張しました。」

席について安堵の息を瑞希さんに早速、俺と明久は体調のことを聞いてみた。

「姫路さん。体は大丈夫？」

「まったくだ。体調管理はしっかりしろよ。」

「えっ、伊達君に、よ、吉井君!？」

俺と明久を見て驚く瑞希さん。俺はともかく、何で明久を見て驚くんだ？

「姫路。明久がブサイクですまん。」

雄二が横から嬉しくないフォローをして来た。

「そんな。明久君は全然ブサイクなんかじゃないですよ!」

「そう言われるとそうかもしれないな。知人に明久に興味を持つ奴がいたような気もするしな」

「それはだれなの（なんですか）！？」

ん？やけに過剰な反応だな。どうしたんだらうか？

しかも、島田さんまでそわそわしているな。

でも、一体だれなんだろうな、明久に興味を持つ人って、親友として気になるな。

「確か、久保・・利光だったかな？」

「男じゃねかよ・・・」

俺がすかさず言うと、明久はさめざめと泣き出した。

「僕、お嬢にいけない・・・」

「安心しろ、半分冗談だ。」

「ねえ、残り半分は？」

「なあ姫路。もう大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり元気です。」

「ねえってば！」

無視され続けて、明久が大きな声を出した。

「はいはい。静かにして下さいね。」

そのせいで先生が、バンバンと教卓を叩いて注意してきた。

「あ、すみませんで……」

バキィツ バラバラバラ……

突然、教卓がゴミ屑と化した。どんだけ酷いんだよ……

「えーっと、予備を取ってきます……。」

と、先生は気まずそうに教室を出て行った。

「けほっ、けほっ。」

「……雄二。ちょっといい？」

「ん？いいぞ。」

壊れた教卓のせいで舞い上がった埃で咳き込む瑞希さんを見て明久が雄二を連れて教室を出て行った。

「面白いことが起きそうだな……!？」

その時、俺の闘争心に反応してアイツが目を覚ました
もう一人の俺が……

(マッタクダゼ。ヨウヤク暴レラレルゼ……)

(くっ、まずいな。こいつが出てこないように抑えねえと……)

俺は小声でそう呟いて、明久達を追って教室を出た。

もう一人の俺を、抑えながら……。

第3問（後書き）

どうでしたか？将人のもう一つの人格が少し顔を出しました。

Bクラス戦のときに本格的に出すつもりです。

では、感想をどんどん送ってください。お待ちしてま〜す！！

第4問(前書き)

以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y
」

姫路瑞希・伊達正人の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。しっかり勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「○

」

x

」

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

第4問

廊下から明久と雄二の話す声が聞こえる。

どつやら『試召戦争』についての事らしいな……

「ねえ雄二。Aクラスの設備を見た？」

「ああ。あれは教室というよりホテルのロビーだな。」

「それに比べて僕達の教室はどう？」

「比べるまでも無いな。」

「だからさ、せつかく二年生になったのだからさ『試召戦争』をやってみたくない？」

「戦争、だと？」

「もちろん、相手はAクラスだよ。」

「……何が目的だ。」

雄二の聲が何かを疑うような声になった。

俺もだ、明久が戦争をやろうと言うのには何か理由があるはずだ。

「えっと。そ、それは設備向上のためだけ……。」

嘘だな……。

「嘘を言うな。勉強する気が無いお前が設備のために戦争なんかしようなんて言う筈がないだろ。」

雄二も明久の目的が分かっているようだな。

「そ、そんな事無いよ。興味がないならこんな学校来るわけ・・・」

「お前がここに来るわけは『学費が安い』からだろ。」

そんな事を前に言った気がするな。確かに、ここは試験校だからバックにいるスポンサーのお陰で学費がとても安い。

「あー、えーっと、その・・・」

明久は、思いつく嘘が無いのか、動揺しはじめた。

「まったく。『瑞希さんの為』って、はっきりと言えよ。」

あまりの明久の遠まわしな言い方に呆れて、俺は明久の本当の目的を言った。

すると、明久は凶星をつかれてビクリと背筋を伸ばした。

「ど、どうしてそれを!？」

「親友なんだから、それくらい分かるぞ。」

「と言うが、いつから聞いていたんだ？」

雄二が、呆れ半分、驚き半分で聞いてきた。

「最初からさ。気配を消して聞いていたんだ。そんなことより、俺は明久の意見に賛成だ。瑞希さんに今の状態はとても悪い。衛生的にも、精神的にもな。」

「まあ。俺もAクラス相手に仕掛けようと思っていたしな。」

「え？雄二だつて全然勉強してないよね。」

「世の中学力だけが全てじゃないって証明してみたくてな。」

なるほど。それは面白いな。

「俺が言うのもなんだが、良いかも知れないな。」

「マサが言うならいいけど、作戦とかあるの？」

「もちろんだ。おっと、先生が戻ってきた。続きは後でな。」

先生が戻ってきたので教室に入る俺達。戦争への闘争心の影響でもう一人の俺の気配が強まってきた。ヤバイな・・・

「えー、では続きとしたい所ですが、時間が無い為代表の坂本君だけ紹介して残りの人は休み時間にしてください。では、坂本君。」

先生は新しい教卓（でもボロ）を置き、雄二を壇上に上がらせた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は好きな風に呼んでくれ。」

代表、このクラスで一番成績が良い人がするのだが、ここは最低クラス、代表と他の人の成績はあまり変わらねえんだよな・・・

。雄二はクラスを見回して全員に質問した。

「さて、皆に聞きたい事がある。かび臭い教室、綿の入っていない座布団、壊れかけのちゃぶ台。Aクラスは冷暖房完備で、座席はリクライニングシートらしが……。」

そして、一呼吸おいて静かに告げた。

「……不満は無いか？」

「……大ありじゃあつ!!!!」「」「」

クラス全員の魂の叫び。割れていなかった窓ガラスが割れたほどだ。

「だろう？俺も大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いとは言え、これはあんまりだ！改善を要求する。」

「Aクラスも同じ学費だろ？差が大きすぎる！」

次々と上がる不満の声。雄二はこれを見て自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべた。なるほど、設備の差を言って戦意を上げるのか……なかなかだな。もつとも、アイツが出て来やすくなるから俺には良くないがな……。

「だから、俺達FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよう
と思っっている。」

雄二は、これから始まる戦争の引き金を引いた。

雄二が宣戦布告している時、俺はアイツと言いつ争っていた。

(モット戦イタイ気持ちヲ出セヨ。オ前モ楽シミナンダロ？コレカラ
始マル、戦争ガヨ！！)

(黙れ。確かに楽しみだが、お前はただ人を傷つきたいだけだろ！)

こいつを表に出すわけにはいけねえ。そうしたら、また誰かを
傷つけてしまう。

すると、アイツは不気味に笑い出した。

(クツクツク。勿論ダ。ダガ、俺ハオ前ノ復讐心カラ生マレタ事ヲ
絶対ニ忘レルナヨ……)

そう言い残してアイツは心の中に消えた。俺は黙るしか無かった、
アイツの言っている事は全て事実だ。

俺は、とても不安になった。せっかく出来た親友を失ってしまう
かもしれないことに……。

第4問（後書き）

疲れた……。今回の話はとても長めになってしまいました。

次回は、いよいよDクラス戦です。バトルシーンが上手く書けるか心配ですが頑張って書いてみようと思います。

感想を待っています！

第5問（前書き）

以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波あって、（ ）（ ）である。』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

伊達将人の答え

『ミノフスキー粒子』

教師のコメント

先生もガンダムは見ていました。

あと、得意科目と苦手科目の差があります。

第5問

「勝てるわけが無い。」

「これ以上酷い設備になるのは嫌だ。」

「姫路さんがいたら何もいらない。」

Aクラスへの宣戦布告の後に出ていた意見は否定的だった。

確かに、AクラスとFクラスの戦力の差は凄いもんだ。

例えるなら、Aクラス一人にFクラス四、五人で勝てるかどうかだ。

「そんな事は無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

ほう、自信たっぷりだな。どんな理由だ？

「何をバカな事を……。」

「出来るわけが無い……。」

「何の根拠があつてそんな事を。」

皆は絶望しているぞ。どう説明するんだ？

「その根拠を今、説明してやる。」

そう言つて雄二は瑞希さんを見た。いや、瑞希さんの手前の方を・

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に

出て来い。」

「……………!!!(ブンブン)」

「は、はわっ!!！」

必死に否定する康太。後ろでは瑞希さんがスカートを押さええている。

そして康太は畳の跡を隠しながら壇上にあがった。

呆れた。よくそんな恥ずかしい事が出来るな。

しかし、呼ばれたと言うことは何か有名な奴なのか？

「土屋康太。こいつがああの有名な『^{ムツツリー}寡黙なる性識者』だ。」

「……………!!!(ブンブン)」

ムツツリーか……男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を
持って

挙げられるんだっただっけ？

まあ、興味がないからその辺の事はどうでもいいや。

「ムツツリーニだと……？」

「ヤツがそうなのか……？」

「だが、明らかな証拠を隠そうとしているぞ……」

「名に恥じない姿だ……」

覗きの証拠を未だに隠そうとする康太。

まったく、いくら隠そうとしたってバレているのに・・・

「?????」

瑞希さんは知らないようだな。もっとも、知らない方がいい。なんせ、名前の由来が、ただのムツリスケべだからな・・・。

「姫路は言うまでも無いな。皆だっけ知ってる筈だ。」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待しているぞ。」

このバカしかいないクラスだ。かなり大きな戦力になるのは間違いねえな。

「まだだ。あの『独眼』で有名な・・・」

「雄二。俺を出すのは良いがその呼び名は使わないでくれ、と言っか使っな。」

その呼び名は好きじゃない。俺が変わっているとされている感じがするからな。

「おっと、すまん。皆も呼ぶ時は将人にしてやってくれ。」

これでいい。俺が変わり者であると言っ事を忘れることが出来る。

「なんだと。奴までいるなんて。」

「このクラスはある意味ラッキーじゃないのか？」

Aクラス級の名前が二人も出ると、クラスの空気も変わるもんだな。

「しかも、木下秀吉だっている。」

秀吉まで出すのか。あいつの場合は演劇能力だろうな。声真似な
んか

某推理アニメの蝶ネクタイぐらい似ているもんな。

「おお・・・！」

「ああ。確か、木下優子の・・・」

「俺も当然全力を尽くす。」

「坂本って、小学の時は神童って呼ばれていなかったか？」

「実質、このクラスにはAクラスレベルが三人もいるのか!？」

士気がMAXだな。すごい状態だぞ。

「それに、吉井明久もいる。」

・・・シーン・・・

何、この下がり様!? 明久にひどいぞ。

「ちょっと雄二! 言う必要あるの!？」

「誰だ、吉井明久って？」

「皆は知らないか。こいつの肩書きは『観察処分者』だ。」

「バラさないでよ！！」

「それって、バカの代名詞だよな？」

「ち、違うよ。お茶目な十六歳につけられる愛称で……」

「そつだ。バカの代名詞だ。」

「肯定しないでよ……」

明久が可哀想だが仕方ない、学園生活上、問題のある生徒にだけ与えられる嬉しくない称号だ。

「あの、それって何なのですか？」

瑞希さんだけ首を傾げていた。上の方にいたからな、知らないのも無理は無い。

「要するに、先生の雑用だ。力仕事などを特別に物体に触れるようになった召喚獣でこなす感じだ。」

その通り。召喚獣は他の召喚獣以外触れないが、明久のは雑用のため物に触れるようになってる。正直、羨ましい所もある。

「それって凄いですね。とても便利ですね。」

目をキラキラさせる瑞希さん。だが、明久は苦笑いして、『そんな事は無いよ』と否定した。『どうしてですか?』と聞いてくると、明久は皆に聞こえるように説明した。

「僕の召喚獣も皆と同じように先生がいないと喚よべないし、召喚獣の負担の何割かは、僕にフィードバックされるから、攻撃を受けると僕に痛みがくるから、メリットなんて無いんだよね。」

「おいおい。全く役に立たねえじゃないか。」

「気にするな、居て居なくてもザコに変わりは無い。」

「あんまりだよ雄二……。」

「ほら、元気だせ。戦争の時、俺とペアを組んで行けばいいだろ?」

「うん……。ありがとマサ。」

シヨンボリとしている明久を慰めていると、雄二は宣言した。

「まず、手始めにDクラスを征服しようと思う。皆、今の状態は大いに不満だろ?」

「「「当然だ!!」「」」

「なら全員ペンを執れ!出陣だ!!」

「「「おおー!!」「」」

「狙うは、システムデスクだ!!」

「「「うおおおー！！！」」」

「お、おー・・・」

控え気味で瑞希さんも拳を掲げていた。大丈夫なのか？

（クツクツク。面白クナツテキタ。マスマス出テ来易クナツタゼ。）

もう一人の俺が邪悪な笑みと共に不気味に笑った気がした・・・。

第5問（後書き）

また長くなってしまいました。

なるべく読みやすいように話の長さを調節したいです。

感想お待ちしております。

第6問 宣戦布告と大乱闘とミーティング前(前書き)

以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に

存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか？

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希、伊達将人の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 \circ 』でなく『 π 』で書いてあるので完璧です。

土屋康太の答え

(1) $X = \pi$ およそ3

教師のコメント

およそを付けて誤魔化したい気も分かりますが、解答に近いですが点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

選択問題でおよそをつける生徒を見たのは初めてです。

第6問 宣戦布告と大乱闘とミーティング前

雄二が高らかに宣言した後、雄二は明久に指令を出した。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者となってもらう。さあ、Dクラスへ逝って来い。」

「下位勢力の使者って、大抵酷い目に遭うよね？」

「しかも、文字が違ったような……。」

雄二は冗談は言うが嘘は言わない奴なんだが……。
何だか怪しい。

「大丈夫だ。奴らが危害を加えるわけが無い。騙されたと思って逝って来い。」

うーん、完璧騙しているな。ボロボロになったのを見て面白がるつもりなんだろうな。しかも、また文字が違ったし……

「本当に（か）？」

「勿論だ。俺を誰だと思っている？」

「ドSゴリラ、サル山の大将、腹黒野郎。」

「……将人、ケンカ売ってんのか？」

「事実を言ったまでだ。ケンカなら喜んで買うぞ。」

もつとも、俺に挑んだらどうなるかは知っている筈だろ？」

「まあいい。とにかく俺を信じて逝って来いっての。」

「分かったよ。じゃあ行って・・・」

「また文字が違う。お前、騙す気満々だな。心配だし俺も一緒に行こう。」

(ちっ、いい勘してやがる。上手く騙すつもりだったのにな)

「疑い過ぎだよ。ただのジョークかもしれないよ？
とりあえず、気を取り直して行って来るよ。」

「そうかも知れないな。雄二、一応信じてやるが何かあったら許さないからな。」

そう言い残し、俺と明久はDクラスへと向かった。

—————Dクラスにて—————

「こんにちはFクラスです。代表は居ますか？」

明久がDクラスへ入って行った。俺は、一応雄二の言った事を信じてみたので、今は廊下で待っている。
もしもの時は、助けに入るつもりだ。

「僕が代表の平賀源二だよ。それで、Fクラスが何のだい？」

「僕達FクラスはDクラスに試験召喚戦争を申し込みます。」

「ここまでは大丈・・・」

「「掛かれー！」「」」

「えっ、ちよつと、みんな何で襲ってくるの？」

「畜生、騙したな雄二！！」

前言撤回、全然大丈夫じゃない。やっぱり騙す気だったんだな。とにかく、明久の救助に行かなくては！

ドアを開けると、明久がギリギリと追い詰められている所だった。俺は、近くにいた奴を殴り倒し、注意がそれた時に明久に言った。

「明久、外に出ろ。こいつ等は俺が相手をする。」

「えっ。そんな数、相手に出来るの？」

「まあ、信じてみる。俺は雄二みたいに騙しはしない。」

「分かったよ。信じてみる。戻ってきたら雄二を処刑しよう。」

そう言い残し、明久は全速力で教室から出て行った。

するとDクラスの連中は狙いを俺に変えて襲い掛かってきた。

「「逃がすな！まずはこいつを血祭りにするぞ！」」

――数分後――

「まだやる気か？」

「もういいです。襲ってすみません・・・」

Dクラスの連中は、ほとんどが床に倒れていた。

「とにかく、用件は伝えたからな。」

俺はDクラスを後にし、Fクラスへ戻った。
あのゴリラ・・・許さんぞ。

「雄二いいい、覚悟しやがれー！！」

「ほう、無傷で戻ってきたか。」

「少しは悪びれるよ！」

「分かった分かった。騙した事は謝ろう。」

「まったく。冗談にも程があるよ。」

明久は納得した様なので良いとしておこう。

「で、これから何をするんだ？」

俺はこの後の行動を雄二に聞いた。

「屋上でミーティングだ。さっさと来いよ。」

雄二はそう言って教室を出て行った。

第6問 宣戦布告と大乱闘とミーティング前（後書き）

今回、題名を付けてみました。ネーミングセンスが無くてすみません。

あと、更新が遅くなってすみません。風邪でダウンして、学校の課題を済ませるのに手一杯でした。

感想をお待ちしています。

第7問 ミーティングとお弁当と開戦に向けて（前書き）

今回、問題はありません。多分、次回はあると思います。
身勝手ですみません。

第7問 ミーティングとお弁当と開戦に向けて

雄二が教室を出て行った後、秀吉が話しかけてきた。

「よく無事じゃったの。まるで鉄人みたいじゃの。」

「いや、けっこうキツかったな。それに、俺は鉄人ほど強くないぜ。」

「まあ、何であれ怪我をしなかっただけでも良かったぞい。」

と言つて、秀吉も教室を出て行った。俺もミーティングに行く為に廊下に出た。屋上だっけ？急ぐか。

「……………(サスサス)」

その後ろを康太と明久が続く。康太は頬を擦りながら歩いている。まだ覗きの証拠を隠そうとしているのか……………

「ムツツリーニ、跡ならもう消えているよ。」

「……………!!!(ブンブン)」

「今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

「……………!!!(ブンブン)」

「ここまでバレているんだ、否定の仕様が無いぞ。」

「……………!!」(ブンブン)

「なあ、康太。何色だった？」

「水色。」

「即答かよ……色んな意味で凄いな。」

「そうだね。」

「ほら吉井。さっさと来るのよ。」

明久は島田に腕を引つ張られながら屋上に行った。

やはり、島田は明久の事を……

通りで瑞希さんが来た時から様子がおかしいと思った。

屋上に着くと、すぐにDクラス戦について話し始めた。

「明久と将人。宣戦布告はしてきたな。」

雄二がフェンス前の段差に腰を下ろしながら聞いてきた。俺達もそれにならって各々腰を下ろした。

「一応、今日の午後に関戦って言ってきたが。」

「まだ時間もあるし、昼食をとってからだね。」

「そうだな。明久、今日はまともな物を食べるよ。」

「まさかだと思うが、またあれか？」

「ごめん。何か奢って貰えると嬉しいんだけど……。」

「まったく。ほら、俺の弁当を半分やる。これを食べておけ。」

「ありがとう。いつもごめん。」

「えっ？吉井君って、いつも伊達君のお弁当を貰っているのですか？」

「いつもじゃないよ。たまに自分のを食べているよ。」

「あれって、食べているのに入るのか？」

「どづいつことだよ、雄二？」

雄二が横槍を入れる。確かに、あれって食べているのに入るのかな？

「お前の主食って……水と塩だろ。」

「砂糖だって食べているよ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ。」

「舐める。と言った方が正解じゃろつな。」

「俺と同じ一人暮らしなのに、何でこんなに差があるんだ？」

「ま、生活費まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

言ったとおり、俺と明久は同じ一人暮らしをしている。違う所と
言えば、

明久の両親は仕事で不在だが、俺は実家から離れて、祖父の所に住
んでいたから

この地から離れられなくなったただけなんだが。

もつとも、理由はそれだけじゃ無いんだがな・・・

「あの、良かったら明日は私がお弁当を作ってきてましようか？」

「えっ、いいの？」

「はい。迷惑じゃなければ。」

「全然！むしろ嬉しいよ。」

「良かったじゃないか明久。手作りだぞ？」

「ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井『だけ』に作ってくるな
んて。」

棘のある言い方だな。ライバル意識でもしているのかな？

「あ、いえ！。皆さんにも・・・。」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなければ。」

良い人だな。みんなとなると結構な量だぞ。

「それは楽しみじゃのう。」

「……………(コクコク)」

「……………お手並み拝見ね。」

「俺もお手並み拝見だな。楽しみだぜ。」

S I D E ????

(マツタク、イツニナツタラ出ラレルンダヨ。マア、良イ。俺ガ出ルソノ時マデ、コイツノ表ノ部分ダケヲ見テイルガイイ。)

第7問 ミーティングとお弁当と開戦に向けて（後書き）

今回も長くなりました。読みにくくて御免なさい。
誤字、脱字がありましたら感想にて。

感想お待ちしております!!

第8問 意気込みと作戦と心配事（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめてませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るよつた。

伊達将人の答え

『とにかく数字と英単語二つがあったはず・・・』

教師のコメント

何とか答えを書こうと必死に考えている事は伝わりました。

第8問 意気込みと作戦と心配事

瑞希さんからの嬉しい報告（一名を除き）の後、話が試召戦争に戻った。

「雄二。どうしてDクラスなんじゃ？順番ならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そう言えば、確かにそうですね。」

「理由は簡単だ。Eクラスとは戦うまでも無いからだ。」

「どうしてそんな事が言えるんだ？」

雄二の答えの意味が分からなく、俺は雄二に質問した。
すると雄二は、

「この場にいる面子をしてみる。」

と言ったので見回してみた。この場には・・・

「ゴリラが一匹、ムツリが一人に・・・」

「美少女が三人、独眼が一人いるね。」

と、俺と明久が合わせて言った。

「誰がゴリラだ・・・」

「あと、ワシが女扱いされたような気がするのじゃが？」

「そつだぞ。雄二はそつだが秀吉は男だぞ。あと、その呼び名は使
うな

と言った筈だが。」

「あつ。ごめん。今度から気を付ける。」

「将人、てめえ・・・」

「分かった分かった。謝るから話を続けてくれ。」

俺が雄二を落ち着かせて？話の続きを頼んだ。

雄二は、コホン、と咳払いをして話を再開した。

「ま、要するにAクラス並が二人も居るからAクラスが目標の俺達が
戦っても無駄つて事だ。」

「じゃあ、何でDクラスなの？」

明久が頭に？を浮かべて聞いた。

「初陣だからな。派手に景気付けしたいだろ？それに、打倒Aクラ
スの

作戦に必要なプロセスだしな。」

「まっ、作戦の方は雄二に任せるから、俺達は雄二の作戦通りに
すれば良いだけだろ？」

「そう言う事になるな。俺に協力してくれるなら、今回のDクラス戦は絶対に勝てる。何せ、俺達のクラスは最強だからな。」

不思議だ。何故かそんな感じがする。雄二の言う言葉には説得力がある。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり下ろしてやるかの。」

「……………(グツ)」

「が、頑張ります。」

「僕達、Fクラスでもやれるって事を見せ付けてやるうじゃないか！。」

みんな、気持ちは同じのようだな。なら、俺達がする事は、

「さて、大将。作戦を言ってくれ。」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

俺達は雄二が説明する作戦に耳を傾けた。

SIDE???

(コノ坂本雄二ツテ奴八、ナカナカノ切れ者ダナ。コイツノ才陰デ
マスマス楽シミニナツテ来タゼ。モウスグ、俺モ出ラレソウダナ・

後八将人次第ダナ……クツクツクツク)

S I D E . . . 将人

聞こえる。奴の声が。平常心を心掛けないと直ぐにでも出てきそうだ。

この後の試召戦争、大丈夫かな？

S I D E . . . 明久

まただ、マサが何か深刻そうな顔をしている。

一体、どうしたんだろう？何か、まだ隠しているのかな？

中学校の時に、全部話してくれたはずなのに . . . どうして？

S I D E . . . 雄二

将人の様子が変わだ。いや、変と言うよりは何かを警戒している様だ。

あいつ、目の他にも何か隠していやがるな。

明久も気が付いたらしいな。将人、明久をあんまり心配させるな。

第8問 意気込みと作戦と心配事（後書き）

再び出てきた『もう一人の俺』！！

これから、話にどう関わってくるのかお楽しみに。

前に言ったと思いますが、表に出てくるのはBクラス戦を予定しています。

次回からDクラス戦ですが、主人公をどうしようか考えています。

感想、お待ちしています。

第9問 開戦と同性愛者と補給中 前編（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい。』

姫路瑞希、伊達将人の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で驚いています。

goodやbad比較級と最上級は語尾に -etや -estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第9問 開戦と同性愛者と補給中 前編

SIDE・・・明久

「吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田さんだ。

改めて見て見ると背は高く、脚も綺麗なのに何か足りない気がする。

何が足りないんだろう？

「ああ、胸か。」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に！」

マズイ。何かのスイッチに触れたみたい。

「そ、それより、試召戦争に集中しないと！」

今、前線にいるのは秀吉率いる先行部隊で、僕達はそこからFクラスの中間辺り

の中堅部隊にいる。引き受けた覚えは無いけど、部隊長なったのだから皆を導く義務

がある。気を引き締めていこう。しかし、本当ならここに居て欲しい人がいないので

正直、不安なんだよね。

「早く戻って来てくれないかな。マサと姫路さん・・・」

SIDE・・・将人

多分、先行部隊はDクラスと交戦した頃だろう。俺も早く加勢に行きたいのだが・・・

「しまったな。俺、テストを受けてない事をすっかり忘れていたぜ。」

そんな事を言いながら数学のテストを受けていた。ちなみに、瑞希さんは教科の違う補給テストを受けている為、俺とは違う教室に居る。

「急がないとな。しかし、戦況はどうなっているんだろう？」

そんな事を考えていると、外から微かな声が聞こえてきた。

「さあ来い！この負け犬が！」

「で、鉄人！？嫌だ！補習室だけは嫌なんだ！」

「黙れ！戦争が終わるまで、たつぷりと勉強漬けにしてやる。」

「嫌だ、あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問じゃない。あれは立派な洗の・・・じゃなくて教育だ。補習後には、趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、と言った理想的な生徒にしてやる。」

「お、鬼だ！誰か、たすけー（ボタン、ガチャ）」

震えが止まらない。しかも洗脳って言いかけているし・・・
連れて行かれた名も知らない生徒、ご冥福をお祈りします。

その間に補給テストを受けに来た生徒が増え始めた。その中に知った顔があつた。

「ん？秀吉じゃないか。ここにいると言う事は、結構マズイ状況なのか？」

「おお、将人か。確かに少々厳しい状況のう。ワシの召還獣もへ口へ口じゃ。」

「成る程。俺はあと少しで終わるから、すぐに加勢に行くから。」

「了解したのじゃ。頼むぞい。」

SIDE・・・明久

「吉井、見て！五十嵐先生と布施先生よ。Dクラスの奴ら化学教師を引っ張って来たわ。」

「立会人の先生を増やして一気に片を付けるわけか。島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ。」

流石はFクラス、お世辞にも良い点数とは言えないな。

「それなら、化学教師を避けて学年主任の所に行こう！」

「高橋先生の所ね？了解！」

見つからないように廊下の隅を通って行く僕と島田さん。この乱戦状態だ、
そう簡単に見つかるわけが・・・

「そこにいるのは、美波お姉さま！先生、こっちです！」

「くっ！ぬかったわ！」

意外と見つかるのが早いんだね・・・。

こっちも召還獣を出して応戦しないと失格で地獄（補習室）行きだ。

後編に続く・・・

第9問 開戦と同性愛者と補給中 前編（後書き）

ようやくDクラス戦です。今回のDクラス戦は前編と後編の二つに分けて進めます。

祝 総合PV11000突破！ユニークアクセス数2300人越え！

沢山の方々、読んでくださりありがとうございます。（これって、凄いのかな？）
これからもどんどん頑張って書きますので、応援、宜しくお願います。

感想をおまちしてまいります。

第10問 開戦と同性愛者と補給中 後編（前書き）

文月学園 試験召喚戦争のルール

1 原則、クラス対抗戦とする。各教科の教師の立会いにより試験召喚システム

が起動し、召喚が可能になる。総合科目勝負は学年主任の立会いの時のみ可能。

2 召喚獣は一人一体のみ所有。召喚獣の強さは、最も近い時期に受けたテスト

の点数に比例する。総合科目は各科目の最新の点数の和にあたる。

3 召喚獣が消耗すると、その割合で点数が減算される。戦死になると0点となり

その戦争中は補習室で補習を受けなければならない。

4 戦死しない限り、補給テストを受けて点数を補充すれば何回でも復活できる。

5 相手が召喚したのに召喚をしなければ戦闘放棄となり、戦死同様に補習を

受けなければならない。

6 召喚が可能範囲は教師から半径10メートル程度（個人差あり）

7 戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行

為となり

処罰の対象となる。

8 戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。この勝敗は

教師が認めた勝負である限り、手段、経緯は不問とする

第10問 開戦と同性愛者と補給中 後編

SEDE・・・明久

島田さんがDクラスの一人に見つかってしまった。

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよつ・・・！普通逆じゃない!？」

「そんな事、現実世界じゃ通用しない！」

「よ、吉井！このゲス野郎！」

そうやって僕は五十嵐先生から10メートル離れて様子を伺う。

相手のDクラスの女子生徒は既に召喚獣を喚び出していた。島田さんもそれに応えて声を上げた。

『^{サモン}試獣召喚っ！』

喚び声に応じて島田さんの足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

そして、姿を現す島田さんの召喚獣。

現れソイツは、軍服姿にサーベルを持っている点を除けば島田さんにそっくりだ。

但し、身長は80センチ程度で、一言で言うならば、『デフォルメされた島田美波』って

感じた。相手も自分の分身を従えていた。武器は、普通の剣みただけ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「いい加減ウチの事は諦めてよ！」

初めて見る召喚獣同士の戦闘。全身に震えが走る。

「ところで島田さん、お姉さまって……」

「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春の事を愛しているはずですよ！」

「この分ならず屋！」

ああ。島田さんがあんなに遠くに……

「行きます、お姉さま！」

二人の召喚獣の距離が詰まる。いよいよ戦闘開始だ。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

二人の気合が廊下に響き、それぞれの召喚獣が正面からぶつかった。

「……のっ」

「負けません！」

迫力満点の鏢迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣。

「島田さん！相手の方が点数が高いんだから、正面からじゃ不利だよ！」

「そんなことは分かっているわよ！けど、細かい動作は出来ないのよ！」

直後、島田さんの召喚獣が鏢迫り合いで負けて、武器を取り落としました。

「ここまでです！」

「くうっ！」

そのまま押し倒される島田さんの召喚獣。その頭上には二人の点数が表示されていた。

Fクラス 島田美波 化学53点

VS

Dクラス 清水美春 化学94点

島田さん、サバ読んでいたな。本当は60点にすら届いてないじゃないか……

S I D E . . . 将人

「出来た！それじゃあ、秀吉。先に行つて来る！」

「そうか。じゃ、頼むぞい。」

俺は、平常心を心掛けながら前線へと急いだ。

S I D E . . . 明久

「お姉さま。勝負はつきましたね？」

喉に剣を突き付けられる島田さんの召喚獣。腕や足に攻撃を食らう位なら点数が

減るだけだが、首や心臓をやられたら即死、つまり補習室送りだ。

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

取り乱す島田さん。だよ、誰だつて補習室は嫌だよ。

「補習室？・・・フフツ。」

楽しそうに笑いながら清水さんが島田さんの手を引っ張っていく。そっちにあるのは保健室ですよ？

「ふふつ。お姉さま、今ならベッドは空いていますからね。」

「よ、吉井、早くフォローを！何だか、今ウチは補習室行きより危険な状況に

いる気がするの！」

うん。見ているだけの僕にもそんな気がするけど・・・

「殺します・・・。美春とお姉さまの邪魔をする奴は、殺します！」

ごめん。ソコに飛び込む勇気が無いんだ。

「島田さん、君の事は忘れない！」

「何で戦う前から別れの台詞を!?!」

「邪魔者は、殺します!?!」

怖い!この殺気はとてつもなく怖い!かなりヤバイって!

第10問 開戦と同性愛者と補給中 後編（後書き）

前書きに、試験召喚戦争のルールを書きました。

あと、更新が遅くなってますみません。実は、足を骨折してしまい、しばらく

歩けなかったのです。読んでくださる人も自分の体調管理は大切にしてください。

感想をお待ちしています。

第11問 参戦と錯乱と同性愛者の末路

SIDE・・・明久

清水さんの召喚獣が迫ってくる。これってかなりヤバイ！なによりの殺気！

「吉井危ない！・・・試獣召喚っ！」

か、彼は・・・クラスメイトの須川君すがわ！ありがとう！今の君は救世主に見えるよ！

Fクラス 須川亮しゅうりょう 化学 76点

VS

Dクラス 清水美春 化学41点

そのまま、須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を吹き飛ばした。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ。本当にありがとう。」

良かった。とりあえず人生の死者にはならずに済んだみたいだ。

「ま、まだやられていません！」

声のする方を見ると清水さんが立っていた。何で！？
さっき須川君にやられたんじゃない・・・

Dクラス 清水美春 化学 3点

「ちっ！点数が低いから一撃でやられていなかったのか。」

須川君が舌打ちをした。確かに、やられたのかと僕も思っていたのに

「美春の邪魔をする奴は、誰であろうと、殺しま・・・」

唐突に言葉が途切れた。すると、清水さんの召喚獣はX字に斬られていた。

その後ろには、三日月が印象的な兜の中から青く後ろで細長く縛った髪を出して
眼帯をした召喚獣が二刀の刀を鞘に収めていた。

Fクラス 伊達将人 化学 211点

SIDE・・・将人

「マサ！やっと来たんだね！」

明久が嬉しそうに言って来た。

「ああ。しかし、こんな奴に襲われているとは・・・」

行った先には、ガツクリと膝をついた清水がいた。

「先生、鉄人先生。さっさとこのレス野朗を連れて行ってください。」

「鉄人じゃない西村先生と呼べ。まあいい、清水、たっぷり勉強
漬けにしてやるぞ。」

今のように、止めを刺されて補習室行きになった状態が俗に言う
『戦死』だ。

「お姉さま！美春は諦めませんから！無事に卒業できるなんて思わ
ないで下さいね！」

どこまでも、しつこい奴だな。あんなのにつけまわされている島
田も大変だな・・・
すると、島田は明久に近づいていった。ただならぬ殺気がする。

「吉井。」

「島田さん、お疲れ。戻って化学のテストを受けてくるといいよ。」

「吉井。」

殺気がだんだん膨れ上がってきた。怖え・・・
明久、気づけよ！

「マサ、須川君行こうか。戦いはこれからだ。」

「吉井いつ！」

「はいっ！」

「・・・ウチを見捨てたわね。」

「……記憶にございません。」

「いや、明久。お前は明らかに島田を見捨てていたな。」

島田の後ろに、大魔王が現れた……

「死になさい！試獣召^{サモ}……」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！」

「止めろ！いくらなんでも明久を攻撃しようとするな！」

「そうだ、吉井隊長は味方だぞ！」

俺と須川で押さえながらも、明久に攻撃しようとする島田。

「違うわ！こいつは、ウチ最大の敵なの！」

……否定できんな。

「須川、さっさと行くぞ！」

「あ、ああ。」

「放しなさい将人、須川！吉井、絶対に許さないからね！」

物騒な台詞だな……さっさと島田を本陣に連れて行くか。
後ろでは、明久がみんなに指示を出していた。

「がんばれよ明久。周りがバカと言っても俺は、お前はやるときは

やるって事

を信じているからな。」

そう言い残し、俺と須川は島田を連れて本陣に向かった。

第11問 参戦と錯乱と同性愛者の末路（後書き）

ようやく参戦した主人公（ほんの少しだけど・・・）
そして終戦に向かうDクラス戦、お楽しみに！

感想をお待ちしています！

第12問 苦戦と叫びと生還率0%

SIDE・・・明久

「隊長！横溝が戦死した！これで布施先生側は残り二人だ！」

「今、五十嵐先生側が俺しかない！援軍を！」

「藤堂がやられそうだ！援護を！」

予想以上に劣勢だ。

本陣に応援を要請したいけど、クラスの戦力を考えると・・・
ここは僕たちだけで持ち堪えるしかない！

「布施先生側は防御に専念して、五十嵐先生側は総合科目の人と交代して

効率よく戦闘を、藤堂君は・・・諦めるんだ！」

『了解！』

一応、隊長としては扱ってくれるみたいだ。みんなが陣形を組み替え始めた。

『Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！』

『何を待っているんだ！？』

戦い方を見て、Dクラスの連中がこちらの意図に気づき始めた。
参った、更にやりずらくなるぞ・・・

『まずい、斥候から世界史の田中が呼び出されたって知らせが!』

『世界史の田中だと!?!』

『Fクラスの奴ら、長期戦に持ち込む気か!』

Dクラスの偵察部隊に、僕達のテストの採点に来た田中先生が見
つかったようだ。

田中先生の特徴は、採点が甘いが時間が掛かるなんだけど、今回は
その方が都合が良い。

「吉井、Dクラスは数学の木内先生きのうちを連れ出したようだ。」

そこへ、さっきマサと一緒に島田さんを連行した須川君が報告し
てくる。

戻ったついでに情報を手に入れて来たのだろう。

数学木内先生は厳しいけど、採点の早さは群を抜いている。

どうやらDクラスは、こちらと逆に一気にケリをつけるみたいだ。

「あれ、マサは?」

「将人なら、錯乱した島田を宥めているから遅れて来ると思う。」

前線を保つのに必要なマサが居ないとなると、もっと厳しくなる
な。

こうなったら、ひたすら時間を稼ぐしかない、その為には、

「須川君!」

「だから、落ち着けて島田。」

「放しなさい！ウチはあいつに罰を与えないと気が済まないのよ！」

俺はこんな感じで、怒り狂う島田を宥め続けている。

「でも、誰だってあの中に飛び込む勇氣は無いと思うんだが。」

「だけど、普通はあそこで簡単に見捨てないでしょ！」

全然、島田の怒りが収まる気配がしない。

しかし、あまり長居は出来ないな。前線は、結構消費していた。今頃、向こうでは戦死者がゴロゴロ出ているだろう。

仕方ない、

「島田。あまり明久に暴力を振るわないようにな。」

このままだと瑞希ライバルさんに明久を取られしまつかもな。」

「!!!!!!」

これは効果ありのようだな。かなり動揺している。

「まつ。あくまで助言だ。どうするかは、自分で考えろよ。」

俺はそう言い残して、本陣を後にした。

前線に向かって、俺は急いでいた。

まあ、あいつの事だ変な指示を出さずと持ち堪え・・・

《お知らせします。船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。》

……はい？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

なんて危険な事を！船越先生は、婚期を逃して生徒に単位を盾にして交際を

迫ったんだぞ！今の放送で、確実に体育館裏で待っているぞ、お前が来るまでずっと！

しかも、今のでお前の貞操も大変なことに……

「す、須川あああああつ！！」

遠くから明久の怨念たつぷりの叫びが聞こえた。

それに重なって、もう一つの叫びも……

『オイ！イイ加減二、戦工ヨ！俺八、モウ我慢デキネエ！！』

その叫びの後、全身に冷や汗か脂汗流れた。

一瞬だけ、アイツが出て来ようとしたからだ。俺が、あまり戦闘をしないのは

これを恐れているからだ。今のあいつは、まだマシなタイプだが、それでも良いとは

言えない。

『平常心を保ちつつ戦闘をする』簡単そうで、簡単じゃない。

でも、明久とクラスの為だ、それ位しないと……

第12問 苦戦と叫びと生還率0% (後書き)

更新遅くなりました。すみません。
なかなかDクラス戦が終わりません。

感想をお待ちしています

第13問 再び苦戦と援軍と時間稼ぎ

SIDE・・・明久

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、残り40点！」

「森川が戻らない！やられたのか？」

さっきの放送で盛り上がった士気のまま戦ってきたが、次第に景気の悪い報告が次々と聞こえてきた。

工藤君と森川君が戦死したので、十八人いた部隊が今では五人になっちゃった。そろそろ限界かな・・・。

「おい、明久。加勢に来たぞ！」

「明久、もう少し持ち堪えろ！」

すると、遙か遠くから雄二とマサの姿が見えた。援軍だ！

『援軍だ！吉井達を全滅させろ！面倒になる！』

マズい！まだ随分と距離がある。このままだと全員補習室送りだ。

「西村雄一郎、戦死！」

残り四人。援軍は・・・まだ遠い！

『Dクラス鈴木が召喚します！』

「Fクラス田中もいきます！」

Dクラス 鈴木一郎すずき いちろう 化学 92点

VS
Fクラス 田中明たなか あき 化学 64点

倒される田中君の召喚獣。

これで残り三人。本格的にマズい！

『押し込め！』

向こうは恐れることなく突撃してくる。ここが正念場だと感じているのだろうか。

Dクラス 鈴木一郎 化学 25点

VS
Fクラス 柴崎功しばさき いちろう 化学 66点

鈴木君を撃破。でも、こちらの戦力も風前の灯だ。

『Dクラス笹島圭吾が行きます。試獣召喚サモン！』

新手が！消耗した柴崎君じゃ抑えきれない！

Dクラス 笹島圭吾ささしま けいご 化学 99点

VS

柴崎君を倒したDクラスの笹島君がこっちに来る。
今の位置は召喚範囲だ、ここで逃げれば失格で補習室送りだ。

『吉井明久！その首貰った！』

考えている暇は無い！こうなったらやってやる！

「^{サモン}試獣召喚！」

叫んだ後、足元に魔方陣が顕われ、中から特攻服を着たもう一人の僕が現れる。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久が貴公の相手を・・・あがあつ！」

肩にいきなりの激痛。何で敵の目の前に出てくるの！？
痛みのフィードバックって結構辛いのに！

『こいつバカだ。俺一人で十分だから、皆は残りを。』

失礼な！場所が悪かったただけなのに！

『くたばれ吉井！』

「そうは、いくかつ！」

襲い掛かってきた相手に、召喚獣を低い姿勢のまま横っ飛びさせる。

そして、ヒョイツ、と通過する敵の足をすくう。

『なっ!?!?』

豪快に転ぶ笹島君の召喚獣。相手が驚いている今の際に、

「ああっ!霧島さんのスカートが捲れている!」

Dクラスの背後を指差して叫ぶ。

『なにいつ!?!?』

凄い。流石は才色兼備。男子どころか女子まで振り返っている。

女子の皆さん、なるべく男子に興味を持つね。噂では霧島さんは女子が好きらしいけど

とか考えながら僕は次の行動に出る。

第13問 再び苦戦と援軍と時間稼ぎ（後書き）

中途半端で申し訳ありませんが、今回はここで終わります。

感想をお待ちしています！

第14問 小芝居と援軍到着と暴走中（前書き）

ヒヨウガ様、感想ありがとうございます。

第14問 小芝居と援軍到着と暴走中

SIDE・・・明久

Dクラスの人達が振り返っている隙に、近くの窓に上靴を投げつける。

ガシャアアン！

破砕音と共に窓が砕け散る。

『な、何事だ！？』

注意が更に逸れた。よし、いける！

『うわっ、島田さんそれで何をする気なの！？』

保身の為の小芝居をうち、壁に備え付けられていた消火器を取る。そして、安全弁を引き抜く。

ブシャアアツ！

景気のいい音と共に溢れ出る消火器の粉末。

『うわっ、何だこれ！？』

『ぺっぺっ！これは消火器の粉じゃねえか！』

『前が見えない！』

これで時間が稼げるはずだ！

「島田さん。君は何て事を！」

念の為にもう一芝居。これで犯人は島田さんだと思つたろう。

『Fクラスの島田め！卑怯な！』

『彼女にしたくないランキングに載せてやる！』

『在学中には彼氏が出来ないようにしてやる！』

『……でも、男らしくてステキ。お姉さま……。』

……何だか骨の一、二本じゃ済まない様な気がする。

そんなことを考えていると、ポン、と肩に手が置かれていた。いつの間にか、マサが後ろに来ていたみたいだった。

「明久、後は任せろ。」

SIDE・・・将人

「それじゃ、マサ。頼むよ。」

そう言うと明久は、消火器を天井のスプリンクラーにぶつけた。すると、スプリンクラーが作動し視界が開けた。

「先生。Fクラス伊達将人、行きます！試獣^{サモン}召喚！」

Fクラス 伊達将人 化学 211点

VS

Dクラス 笹島圭吾 化学 74点

「こんな奴、素手で十分だ。」

そう前置きをして、俺は敵の召喚獣に一気に詰め寄り、腹部に強烈な

一撃を与えた。勿論、敵は戦死した。

『くっ、ここは退くぞ!』

敵が撤退していく。本来なら追いかけるのが定石だが、

「追撃しなくいい。俺達も一旦戻るぞ。」

雄二の指示は反対だった。確かに、明久の部隊は、ほぼ全滅だ。しかも、下手に追撃して本隊が出てくるのを嫌ったのだろう。・・・そう言えば、さつきから意識が朦朧とするな・・・

・・・まさか!?

そう思った時、俺の意識が後ろへ引つ張られるのを感じた。そして、アイツが出て来た。

(クッククック。シバラク暴レサセテモラウゼ。今マデ抑エテ来タ闘争心ノ分ナ・・・)

初メテノ試召戦争ダ、楽シマセテ貰ウゼ。(

「・・・・・・・・・・。」

「おい、将人。一旦戻るぞ……って、おい！どこへ行く！」

雄二の呼び止める声が聞こえるが、今、体はアイツが支配している。

俺が体を取り戻すまで、もうしばらく掛かる。どうすることも出来ない。

今のアイツは……好戦なタイプか。今だけは都合が良いかもしれない……

第14問 小芝居と援軍到着と暴走中（後書き）

とうとう出て来た、将人の裏人格。これからどうなってしうのか？

次回をお楽しみに！

更新が遅くなってますみません。

感想をお待ちしています。

第15問 瞬殺と決着と裏人格

SIDE・・・明久

「おい、将人！どこへ行く！」

いきなり雄二が叫んだ。

「どうしたの！？」

「将人がDクラスを追撃して行った。」

「ええっ！いくらマサでも無理なんじゃ・・・」

マサの実力はAクラスだが、消耗して袋叩きにされたら一溜りも無い。

「明久、お前は戻って補給を受けろ！将人は俺達が追っ！」

「でも、雄二が倒されたら負けなんだよ！」

「心配すんな。お前よりは点数は上だ。」

ノーコメント。事実だし・・・悔しいけど。

「わ、分かったよ。とりあえず頼むよ。」

ここは雄二に任せよう。でも、どうしたんだよマサ！

S I D E . . . 雄二

「クラス全員に連絡！作戦変更、今からDクラスに総攻撃を掛ける！」

くそつ、作戦が大幅に狂ってしまった。

しかし、一瞬あいつの顔を見たが、まるで別人だった。

目は、冷え切った冬の夜みたいに冷たかった。

「どうしたんだ、将人^{あいつ}は？」

S I D E . . . 将人？

Fクラス 伊達将人 化学 174点

V S

Dクラス 山中幸一 化学 0点

「. . . 五人目。」

アイツが小さく呟いた。戦闘開始から僅か二分。これで五人撃破。流石に、この点数差に飽きて来たのか、なぶり殺しをしていない。

(なあ、将人？こんなのもつまらねえぜ。)

俺の意識に話しかけてくるアイツ。

(さつさと奥に消えろよ. . .。)

(嫌だ。折角、出て来れたんだ。もう少し暴れるぞ。)

(すぐに取り戻してやる。今の内だぞ・・・)

意識の中で言い争っていると、雄二たちが見えた。

(ちっ、もうきやがったか。)

(今だ！)

気を取られている隙に、俺は体の主導権を取り返しアイツを奥へと押し込んだ。

SIDE・・・雄二

「将人！お前って奴は、作戦のことも考えろ！」

「す、すまん・・・。」

後退してきた将人を、俺は叱り付けていた。

「しかし、お前らしくないぞ。どうしたんだ？」

俺はさっきの行動について聞いた。

「・・・自分の力を過信していた。」

将人はそんな風にしか応えなかった。

「まあいい。次は気をつけろよ。」

そんな事より今は試召戦争だ。やはり、いくら本隊でも所詮はF

クラス
苦戦は免れない。

『そのまま坂本雄二の首を取れ!』

ん? 奴は・・・Dクラス代表平賀源二ひらがけんじ! 本隊が出てきたのか!?

「雄二! 僕も来たよ・・・って! やられそうじゃないか!？」

何故か明久も来た。が、全然戦力にはならんな・・・

「見てのとおりだ! さっさと援護をしろ!」

仕方がないが、俺は明久に援護を求めた。

「だってさ、姫路さん。それじゃよろしく。」

「えっ!? は、はい!」

すると、平賀の後ろに姫路が立っていた。平賀は呆然としている。

「さ、試獣サモ召喚です。」

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点

VS

Dクラス 平賀源二 現代国語 129点

「う、うめんなさい!」

姫路の召喚獣が、一瞬で平賀の召喚獣を倒し、Dクラス戦は幕を

閉じた。

第15問 瞬殺と決着と裏人格（後書き）

感想をお待ちしています！

第16問 戦後対談と口論と殺人未遂

SIDE・・・将人

「「「うおおー！！！！」」」

Dクラスの敗北が決定した時、Fクラスは歓喜渦だった。

「まさかDクラスに勝てるなんて！」

「坂本雄二サマサマだな！」

「坂本、握手してくれ！」

「お、おう。何つか、少し恥ずかしいな……。」

照れる雄二。まあ、英雄だもんな。

「雄二、僕も！」

「ん？明久か。」

明久も握手を求めて……って、何で包丁なんか持ってるんだ？

「それじゃ、早速……くたばれえ！って、あれ？包丁は？」

「これの事が、明久？」

驚く明久を尻目に、包丁を持つ俺。

「誰か、ペンチを持ってきてくれ。」

「ストロップ！僕が悪かった。」

「ちっ。」

残念そうに舌打ちをする雄二。

「何で雄二を殺そうと?」

理由を聞くと明久は、

「須川君に聞いたら、『あの放送は雄二に指示された。』って、言
ったんだ。」

「なるほど。」

「どうやら、殺人未遂の原因は雄二にあるようだな。」

『まさか、姫路さんがFクラスなんて・・・』

雄二に制裁を加えようとした時、後ろから平賀がヨロヨロと歩み
寄ってきた。

「ルールに従って、設備は渡そう。でも今日は時間だから明日で良
いかな?」

再び戦争が出来るまで、三ヶ月間もあの設備か・・・敵とは言え、
可哀想だな。

「いや、交換はしない。但し条件がある。」

「えっ、どうして!?!」

驚く明久に説明する雄二。

「俺達の目標 A クラスだ。D クラスの設備に興味は無い。」

「それでも普通の設備が手に入るのに。どうしてさ?」

「目標はあくまで A クラスだろ?」

「じゃあ、何で最初から A クラスにしなかったんだよ?」

口論を始める二人。しかし、もう下校時間なんだからさっさと帰りたいので、

「そこまでにしてくれ。理由は帰りに聞かせて貰え。俺はもう帰りたいんだ。」

俺が割り込んで話を終わらせる。

「そうだな。んじゃ、話を戻して。条件は、あの B クラスのエアコンの室外機を

俺が指示をしたら壊してほしい。」

「それだけでいいのか?」

驚く平賀。確かに、あの設備で三ヶ月過ごすより遙かにいい。

「ああ。Bクラス戦のためだ。」

「分かった。その条件、ありがたく吞ませて貰う。」

「詳しいことは後日話す。今日は解散して良いぞ。」

平賀が条件を呑み、今日は解散となった。

第16問 戦後対談と口論と殺人未遂（後書き）

感想をお待ちしています！

読んでくれている読者の皆さんにお願いです。

前書きで書く問題を感想にて送ってください。

なるべくオリジナルがいいです。

よろしく願いします！

第17問 帰路と決心と勘違い

SIDE・・・明久

雄二の号令で解散となり、みんなは次々と帰っていった。

「僕達も帰ろうか。結構疲れたし。」

「そうだな。」

「ああ。」

今日は勝てた満足感が大きいけど、疲労感も大きい。帰ったら大人しく寝よう。

「あ、あのっ、坂本君っ。」

「お、姫路か。どうしたんだ？」

雄二を呼び止める声が聞こえると、姫路さんがいた。

「実は、聞きたいことがあるんです。」

と、姫路さんは興奮気味に話してきた。大事な話らしい、僕と同じ事を思ったのか、マサも僕と一緒に席をはずした。

「おう、分かった。」

そう応えると、少し離れた場所で話し始めた。

かなり大事な話らしい、凄く集中して聞いている。ん？もしかして、今、僕は存在を認識されていない？眼中にないって事？それだったら・・・スカート捲り放題じゃないか！

『やってしまえよ明久。こんなチャンスは滅多にないぜ。』

これは、僕の中の悪魔！？誘惑しに来たんだな。しかし、僕の正義の心が負けるもんか！

.....。

あれ？僕の中の天使は？これじゃ僕の中には悪の心しかないみたいじゃないか！

「まっ、元々はアイツがそんな相談をして来たからだ。」

「あの、吉井君がそんな事を言った理由って・・・」

僕が僕自身と戦っていると、二人がこっちに歩いてきた。

「そう言えば、振り分け試験で何かあったらしいが、関係があるかも知れんな。」

バカにはバカなりに譲れない所があったってことだろ？」

愛嬌たっぷりの笑顔で答える雄二。何だか楽しそうだ。

まさか、愛の告白！姫路さんは雄二の事が好きだったのか！

「・・・行動が仇になってる。まあ、後は瑞希さんと明久次第だけど・・・。」

「えっ？何か言った？」

「何でも。」

マサが、何か意味有り気なことを言った気がした。

「と言うわけで、俺が話せるのはここまでだ。姫路の想像は間違っ
てないと思うぞ。」

話を終えて雄二がこちらにやってきた。

「話のもついいの？」

「ああ。決心もついたらしいし、な？」

雄二が言うと、姫路さんは顔を真っ赤にした。

「ふーん。そっか。じゃあ帰ろうか。姫路さん、またね。」

「は、はい！さよなら！。」

赤い顔の姫路さんに見送られ、教室を後にした。

『……………捲つてもいいじゃない？』

天使遅すぎ！しかも肯定してるし。

SIDE・・・将人

「ねえ。Dクラス戦って必要だったの？室外機くらい別の方法でも壊せると思っけど？」

「それに、なぜ交換しなかったんだ？」

「ああ、その事か。」

俺達は帰る方向が同じだ。だからこうしてよく三人で帰ってる。

「理由は、クラスを試召戦争に慣れさせること、他のクラスにプレッシャーを与えること、

後は、自信を付けさせる為かな。」

「なら、Dクラスと交換しなかったのは？」

「すると、満足して戦争の反対する奴が出てくるから、今のモチベーションを保つ為だ。」

凄いな。ここまで考えてるんで。流石は、元神童だな。

「まあ、俺は俺達の目標を達成するまでお前に付いてくただけだ。」

「僕もだよ。」

明久が俺の考えに賛成した。言い出した明久が雄二に託したんだ、俺は反対する気は無い。

「その為にも、明久にだって協力して貰うぞ。あと、将人。あの時は本当のどうしたんだ？」

まるで別人みたいだったが……」

意外と鋭いな……。しかし、この事だけは言えない。

「理由はもう言っただろ。その事はどうでもいいだろ。」

「まあ、終わったことだ。気をつけるよ。明久も帰ったら勉強しろよ。」

「分かったよ……。あつ！教科書全部忘れてきちゃった！」

「アホ、さっさと取りに帰れ。俺は待たんぞ。」

「どうする？一緒に行くか？」

「雄二はともかく、マサはいいよ。もう遅いし。先に帰っていいよ。」

そんな感じで、明久と別れて俺と雄二はそのまま帰った。

第17問 帰路と決心と勘違い（後書き）

少し長くなりました。

感想をお待ちしています！

第18問 苦悩と意気込みと衝撃事実（前書き）

こんにちは。作者のWINGです。

今回の話は主人公、将人の家での事です。

新しいオリキャラが出てきます。

お楽しみに〜！

第18問 苦悩と意気込みと衝撃事実

SIDE・・・将人

「ただいま、って誰も居ないがな・・・」

その後、雄二とも別れて、俺は自分の家に着いた。

ちなみにこの家、元々祖父の家だったが、大分前に祖父が亡くなつてからは

俺が一人で住んでる。しかもこの家・・・一人暮らしには大きすぎるんだよな。

「はあ・・・」

俺は自分の部屋に入ると、ベッドに大の字に寝転ぶと同時に大きなため息をはいた。

理由は簡単、アイツが出てきて雄二から疑惑の目を付けられた事だ。このままだと知られるのは時間の問題だ。

「（今更、『俺にはもう一つの人格があつて、怒ったり、闘争心を燃やすと入れ替わってしまう。』なんて言える訳がないよな・・・。）」

知られたくない。知られたら、またみんなから怖がられるかも知れない。

何より、親友を失いたくない。

「（今後、アイツを絶対に出さないようにしないとな・・・。）」

そう思ったとき、

priii、priii

と、部屋にある電話の子機が鳴った。

「もしもし、伊達ですが。どちら様でしょ・・・」

「あっ、お兄ちゃん？あたしだよ！葵だよ！」

電話は俺の妹、葵あおいからだった。にしても、この時間に何の用だ？

「どうしたんだ、こんな時間に？」

「えっと、大事な話なの。香奈ちゃんに代わるね。」

マジで？香奈こと城崎しろさき香奈。

俺の幼馴染で、俺の好きな人（でも、告白してない・・・）

「将人君？香奈だよ。えっと、大事な話ってね・・・その・・・
何て言えば・・・」

聞こえる好きな人の声。鼓動が早くなる。それにしても、どうしたんだ？

やけにモジモジしているように聞こえる。

「えーっと。私達、そっちに行く事になったの！」

・・・思考回路がマヒした。

「イツナンデスカ？」

『何で片言に？そんなに驚いた？それで、いつ来るかなんだけど、はっきりと決まってるないんだけど、多分・・・今週中くらいかな？』

「何で来ることになったんだ？」

落ち着きを取り戻しつつ、来る理由を聞いた。

『えっと。葵ちゃんが『あたしもお兄ちゃんの所に行きたい！』って言ったなら、

将人君のお父さんがあっさりと許してくれたんだよ。』

「あ、葵のやつ・・・」

俺が呆れて言うと、電話の向こうで葵が『だって、いつまでも離れていたくないもん。』
と言っていた。

葵、ブラコンにも程があるぞ。親父もあっさりとは許すな。

『という事だから、そっちに行ったらよろしくね。』

そう言って電話を切った。

「・・・この戦争、絶対に勝たないとな・・・」

俺は呆然としながら言った。明日のBクラス戦、気合を入れて戦わないと・・・

第18問 苦悩と意気込みと衝撃事実（後書き）

よくある展開で、妹と幼馴染が登場！

ネーミングセンスが無くてすみません。

詳しいプロフィールはもう少し後で出します。

感想をお待ちしています！

第19問 勉強と暴行と逃走

SIDE・・・将人

衝撃告白の翌日、俺はいつもより早めに登校した。

そんなに点数は減っていないが、補充テストの勉強をするためだ。妹と幼馴染が来ることになったんだ、少しでも点数を上げて今日の戦争に勝たないと。

勉強開始から数十分、そろそろ切り上げようと思ったとき、

「おはよー。」

明久がギリギリの時間で登校してきた。

「おう明久。時間ギリギリだな。」

「ん、おはよう雄二。」

明久と雄二が朝の挨拶をした後、明久は自分の席？について俺に話しかけてきた。

「マサもおはよう。って、今日は気合が入ってるね。」

「まあ、な。」

「何か良いことでもあったのか？」

『妹と幼馴染が同棲することになりました。』何て言った瞬間、Fクラスの男子全員に

嫉妬されて襲われること間違いナシ。
そうなると面倒なので伏せておこう……。

「別に……。」

「ま、お前がやる気満々なら、代表としてはありがたい。それよりも……。」

そう言うと、雄二は明久に話しかけた。

SIDE・・・明久

マサと話し終わると、雄二は僕に話しかけてきた。

「それよりも、明久。お前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ。」

昨日の後始末？・・・ああ、雄二を殺る事か。

「さすがの僕も、生爪を剥がされる事が分かっていてそんな事はしないよ。」

「いや、俺の始末じゃなくて。」

じゃあ何だろう？雄二の言いたい事が分からない。

「何が言いたい……。」

「吉井っ!!」

「じぶあっ!」

僕の台詞が突然遮られた。

「し、島田さん。おはよう・・・」

「おはようじゃないわよっ!」

随分と怒っている島田さん。僕が何をしたんだと言うんだ?

「アンタ、昨日は見捨てただけじゃなく、消火器のいたずらと窓を割った犯人に仕立てたわね。」

あ、そのことか・・・

「おかげで『彼女にしたくないランキング』が上がっちゃったじゃない!」

まだ上がる余地があるんだ・・・

「と、本来なら掴み掛かっている所なんだけど。もう十分な罰が与えられてるから許してあげる。」

「いや、殴ってる時点で充分だと思っが・・・。」

「伊達、そういうことじゃなくてね。」

マサの言葉を否定して、島田さんが愉しそうに言った。

「吉井。一時間目の数学のテスト、監督の先生、船越先生だって」

その先生の名前が出た瞬間、僕は廊下を疾駆していた。

第19問 勉強と暴行と逃走（後書き）

感想をおまちしています！

第20問 お弁当と気持ちと恋愛事

SIDE・・・将人

「うあー・・・づがれだー。」

「やっぱり、テストは疲れるな。」

俺は四教科のテストを終えて、昼食の準備をしている。

ちなみに、明久は船越先生に近所のお兄さん？（三十九歳／独身）を紹介して何とか貞操を守ったらしい。

「うむ。疲れたのう。」

いつの間にか近くに来ていた秀吉が答える。

今日は髪をポニーテールにしている。本人の容姿と合って可愛いな・・・おっと、失礼な発言だ。

「・・・・・・・・（コクコク）」

ムツツリーニまでいる。頷くのは良いが、秀吉を撮ろうとするな・・・

「よし、昼飯食いに行くぞ！」

「じゃあ、ウチも一緒していい？」

「僕は贅沢にソルトウォーターでも・・・」

「みんな、昨日の約束を忘れてないか？」

学食に行こうとするみんなを呼び止めて、昨日の約束を言う。

「おお、もしやの弁当かの？」

「あつ、はい。迷惑じゃなかったらどうぞっ！」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出した。

「迷惑なもんか！ね、雄二。」

「ああ、とてもありがたい。」

「そうですか？良かったあ〜。」

明久の答えを聞くと、嬉しそうに笑う瑞希さん。
好きな人から言われると嬉しくなる気持ちはよく分かる。

「むー・・・瑞希って、積極的なのね・・・」

親の敵のように明久を睨む島田。その気持ちは、分からないこと
もない。

「それでは、ここじゃなく屋上で頂こうかの。」

「賛成だ。」

「そんじゃ、先に行つててくれ。俺は飲み物を買ってくる。昨日の

「礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「まあ、これはこれでアリかな？」

「明久はその行動に、驚き半分、恐怖半分ってところだな。」

「きちんと俺たちの分をとっておけよ。」

「大丈夫だつて。」

「そつだ、早く戻ってくれば良いだけだろ。」

「そつだな。じゃあ、なるべく早く戻ってくる。」

「そつ言つて、雄二と島田は一階にある売店に向かった。」

SIDE・・・雄二

「俺と島田は、売店の横にある自販機で飲み物を買っていた。」

「しかし、島田も大変だな。」

「え、何が？」

「気の利く恋敵ライバルがいるとさ。」

「なっ！！！」

「俺が言った言葉に、島田は顔を真っ赤にした。」

「もう！伊達に続いて坂本までからかうの！」

「ほお、あいつもそんな事を言ったのか？」

『伊達には好きな人がいるらしい』って、噂があったがどつやら確率は高そうだな。

「ともかく、ウチだってやるときはやるんだから。」

島田は相手が誰であれ、諦める気は無さそうだ。

第20問 お弁当と気持ちと恋愛事（後書き）

感想をお待ちします！

第21話 食中毒と勉強会と意外な事実

SIDE・・・明久

屋上に出ると、空は絶好のお弁当日和だった。

他に人影はナシ、僕らの貸しきり状態だ。

「天気良くて何よりじゃのう。」

「そうですね。」

わいわいと準備をして、いよいよお弁当を開ける時が来た。

「あの、あんまり自信は無いんですけど・・・。」

姫路さんが蓋を開けると中には、から揚げや、エビフライなど定番のメニューが入っていた。それらを見て、僕たちは歓声を上げた。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に・・・。」

「・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニっ。」

素早いムッツリーニがエビフライを摘み取り、そのまま口の中へ入れ、

「・・・・・・・・・・（パク）」

ボタン、ガタガタガタ

顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

マサと秀吉と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌ててムツツリーニを呼ぶ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ムクリ、グッ）」

すると、ムツツリーニが起き上がり姫路さんに親指を立てた。

多分、『凄く美味しいぞ』って伝えようとしているのだろう。

でも、足がガクガクして僕にはK O寸前のボクサーにしか見えないんだけど・・・・・・・・。。。

「康太、無理をしなくていいぞ。」

将人がムツツリーニに言うと、姫路さんに質問した。

「あの、瑞希さん。これに一体何を入れたんだ？」

「えーっと、その・・・・・・・・」

姫路さんが答えようとした時、

「おう、待たせたな。へー旨そうだな、どれどれ？」

「まっ、待て雄二！」

マサが止める暇も無く、玉子焼きを口に入れて、

パク、ガタン・・・・・・・・ガシャンガシャン、ガタガタガタ

同じように豪快に倒れた。

「さ、坂本！ちょっと、どうしたの！？」

遅れてきた島田さんが駆け寄る。

・・・・・・・・コイツは、本物だ・・・・・・・・。

「瑞希さん、本当に何を入れたんだ？」

「変わった物を入れてないんですけど、酸味を足すのに酢酸を使っ
た位です。」

「「「はあっ!?!」「」」

。お、恐ろしい・・・・・・・・。料理に薬品使う人初めて見たよ・・・・・・・・。

「明久。金やるから購買で何か買ってきてくれ。あと、緑茶は多めに
買ってきてくれないか？」

「・・・・・・・・うん、分かった。」

そんな感じで、僕は購買に向かった。

SIDE・・・将人

「まったく、凄いものを作ったな……………」

「そうじゃのう。流石に恐怖を感じたわい。」

「へえ、瑞希って料理出来ないのね。」

「すみません……………」

恐怖の昼食を終え、俺と明久は、ダウンした雄二と、意識こそ保つてるものの未だに苦しそうにしている康太に緑茶を飲ませている。

「まあ、誰だって失敗は付き物だ。これから練習してけばいいさ。」

「そうだね。姫路さんならすぐに出来るようになるよ。」

シヨンボリとした瑞希さんを慰めながら、雄二と康太の復活作業を続ける。

「そうだな……………。今度、明久が料理を教えると言うのはどうだ？」

「…………えっ!?!?」

俺の提案に、瑞希さん、明久、島田の声が重なる。

「材料は瑞希さんが用意して、明久が教える。悪くないだろ？」

「それって、吉井が瑞希と二人きりで教えるってこと！？」

島田が食いついてきた。まあ、予想はしていたが。

「それなら、島田も行けばいい。二人で教える方が効率も上がるしな。」

「そ、そうさせて貰うわ。」

料理の勉強会の話が一段落したところで、雄二が目を覚ましたので話を試召戦争に移した。

第22問 復活とジャンケンと作戦会議

「うう………。危うく川の向こうに逝っちまう所だったぜ……。」

「……………（コクコク）」

復活した雄二を囲んでBクラス戦について話し始めた。

ちなみに、雄二には緑茶をペットボトル二本分飲ませたて蘇生に成功した。

うわ言を言い始めた時は、もうダメかと思ったがな……。

「なあ、雄二。なぜBクラスと戦うんだ？」

「そつだよ。目標はAクラスなんだよね？」

「正直に言っつ。」

雄二が神妙な面持ちで言った。

「今の俺たちの戦力じゃ勝てない。」

おいおい、いきなり敗北宣言するなよ……。

確かに、Fクラスから見ればAクラスの実力は別次元だ。

一クラス五十人中、四十人はまだ良い、Bクラスと同じ位の実力だからな。

でも、残り十人はヤバい。特に代表の翔子と俺が戦ってもどっちが勝つか分からない。

「それじゃ、Aクラスは諦めてBクラスの設備にするの？」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄二、さっきと言っていることが違うじゃないか。」

「だが、団体では勝ってこないから、Aクラス戦は一騎打ちに申し込む。」

「どっやって?」

何となく雄二の考えが分かった気がする。

「その為のBクラス戦なんだろ、雄二。」

「そっいう事だ。」

「???」

分からない明久に、雄二は説明し始めた。

「明久。試召戦争で下位クラスが負けたらどうなる？」

「え、えーっと……」

「（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ。）」

「設備のランクを落とされるんだよ。」

何とか、瑞希さんの助け舟で答えた明久。知らなかったんだな・

「……まあいい。つまり、BクラスはCクラスの設備になる訳だ。」

「そうだね。常識だね。」

知らなかったくせに……

「では、上位クラスが負けたら？」

「悔しい。」

「違うだろ……。相手と設備を交換されるんだ。」

俺が答えると、明久は「そうなんだ」と言う顔になった。

「つまり、うちに負けたクラスは最低設備と入れ替えられる訳ね。」

「ああ。そこを利用して、交渉する。」

「交渉ですか？」

「Bクラスを倒したら、設備の交換をしない代わりにAクラスに攻め込むように交渉する。」

設備をFにされるより、Aクラスに負けてCクラスの設備にされる方が断然いいから、
上手く行くはずだ。」

「それで？」

「それをネタに、Aクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負後に攻め込むぞ』」

と言った具合にな。」

「なるほどねー。」

学年二番手との後、すぐにまた戦争。俺たちには高い士気がある、連戦くらいは大丈夫なはずだ。だが、Aクラスには得になることが無い。士気の差は明らかだ。

「じゃが、それでも問題があるじゃろう。Aクラスとしては一騎打ちより試召戦争の方が確実にやるうし。それに、そもそも一騎打ちで勝てるんじやろうか？」

姫路や将人の事は既に知られてるじゃろう。」

確かに、FクラスがDクラスに勝ったとなると、当然、注目を浴びる。

俺や瑞希さんの事は知られてるはずだ。

「その辺は考えがある。心配ない。」

自信満々だな雄二。

「んじゃ、細かい所は後で説明する。それじゃ、明久。テストが終わったら宣戦布告に行って来てくれ。」

また明久に行かせるのか。勿論、明久の答えは……

「嫌だよ。雄二が行ってきてよ。」

まあ、当然の反応だな。

「分かった分かった。それじゃあ。『普通』のジャンケンで、って
おい！」

俺が雄二の言葉に被せて言った。

「お前、また何か企んでいるだろう。普通にやれ。」

「ちつ。仕方ない。いいだろう。」

「普通にやるんだったらいいよ。」

「行くぞ、ジャンケン、」

グー（明久） パー（雄二）

……結局、負けるのか明久。

「決まりだ。行って来い。」

「うっつ。……分かったよ。」

悔しそうに、明久は渋々了解した。

「大丈夫だ。Dクラスの時みたいに襲い掛かってくる事は無いぞ。」

「何で？」

「何故なら、Bクラスには美少年好きが多いらしい。」

「それなら安心！」

絶対嘘だな。でも、面白そうだからいいか……

「それじゃ、頼んだぞー。」

雄二の声でお開きになり、勉強漬けの午後が始まった。

第22問 復活とジャンケンと作戦会議（後書き）

遅くなりました。

しかも今回はかなり長くなりました。

第23問 悲鳴と俺とやって来た妹と幼馴染(前書き)

少し長くなりました。では、どうぞ！

第23問 悲鳴と俺とやって来た妹と幼馴染

S I D E . . . 明久

午後のテストが終わった後、僕は宣戦布告のためにBクラス前にいた。

「ここがBクラスの教室かー。Aクラスには劣るけど、なかなか立派な設備だなー。」

そんな事を呟きつつ、少し心配した。

「だ、大丈夫だよな。襲われないよね……。」

この前のDクラス戦（被害には遭ってないけど）の事を思い出し足がすくんだ。

「……本当にBクラスには美少年好きが多いのかな？。……よし、雄二を信じよう！」

そう言っつて、僕はBクラスの扉を開けて中に入った。

「誰だ？ここに何のようだ？」

代表らしい男子が話しかけてきた。

「こんにちはは、Fクラスの者です。僕たちFクラスはBクラスに宣戦布告します！」

「・・・・・・・・・・。」

僕が宣言すると、Bクラスはとても静かになった。

「そうか、分かった。」

代表らしい男子がそう言ったので襲われる事は無いと思い安心した。

「だが、宣戦布告の使者を只で帰す気は無い。」

えっ、何か雄二と言っていた事と違うんだけど？

すると、脳裏に雄二が黒い笑みを浮かべている姿が浮かんだ。

「ゆ、雄二いいいいっ！また騙したなあっ！！」

「掛かれえー！！！！」

「ぎゃああああー！！！！！！！！！！」

学校に僕の悲鳴が響き渡った。

S I D E . . . 将人

「・・・・・・・・・・言い訳を聞こうか」

そう言つて、雄二に詰め寄っているのはボロボロの体と制服姿の明久だった。

「予想通りだ。」

あっさりと認める雄二。

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け。」

「ぐぶあっー！」

雄二の強烈な鳩尾打ち。明久は倒れた……。

何で、某人気RPGゲームのやられた時みたいに言っただらろう？

「先に帰っているぞ。明日もテストなんだ。あんまり寝ているなよ。」

そう言い残して、雄二はさっさと帰っていった。鬼だな。

「うう……腹が……」

「大丈夫か、明久？」

「ありがとう。優しいのはマサだけだよ。」

肩を貸して、明久を保健室に連れて行くこととする。

「気にするな。荷物は後で持って行くからな。」

そう言うと、明久は教室を見た。視線の先には、キョロキョロと周りを見回している

瑞希さんの姿があった。何かを探しているのか？

だが、今は明久を保健室に連れて行くことが先なので、俺は明久と一緒に教室を出た。

「(明日もテストか。最近はずっとテストばっかだな。)」

帰り道。俺は明久を保健室に連れて行ったので、いつもより遅く帰路についていた。

「(しかし、瑞希さんは何を探していたんだろう?)

……意外にも明久宛のラブレターかもな。まあ、明日、直接聞けばいいか。)」

「(それよりも、設備を向上させないと。あの二人が来たら絶対体調を崩すだろうな。)」

二人のことを思い出し、絶対Bクラス戦に勝たないと思いつつ、家に着いた。

玄関で靴を脱ぎ、リビングのドアを開けて、

「ただい……………」

「お兄ちゃんーん!!」

『ただいま』と言おうとした時、何かが俺に飛び付いて来た。何? 新手の強盗!?

「えっ、誰だ……………って、葵!？」

「そつだよ!」

そう言っつて、抱き着きながら俺を見上げているのは、妹の葵だった。
そして、

「おかえり、将人君!」

俺の好きな人で幼馴染の、白崎香奈がリビングから出てきた。

「あ、ああ。ただいま。」

とりあえず、話をする為にリビングに入って、俺は椅子に座り、二人を向かい側のソファーに座らせた。

「いつここに着いたんだ?」

「さつき。大体、二、三十分前だよ。」

葵がそう答えた。

二、三十分前か、明久を保健室に連れて行った頃だな。

「それで、学校はどうするんだ?」

「明日から行くつもりだよ。転校届けもちゃんと書いてあるし。」

そう言っつて、香奈が二人の名前が書かれた転校届けをみせた。
流石は香奈だ。やるのが早い。

「分かった。それじゃあ明日俺と行くか。」

「もちろん！」

「あつ。部屋の割り当てをしなくちゃな。」

二人が来たので、部屋を決めないといけないな。

ちなみに、部屋は二階にあり、廊下を挟んで左右に三つずつ、廊下の突き当たりに

一部屋と合計七部屋ある。俺の部屋は階段が一番近い、右側の部屋だ。

二階の地図を簡単に書いて二人に聞いた。

「どこがいい？」

「お兄ちゃんと同じ部屋！」

「ダメに決まってるだろう。一緒だと寝てる間に何をされるか……」

「分かったよ……じゃあ、隣の部屋。」

「了解。香奈は？」

「私は……向かい側の部屋でいいよ。」

「決定だな。ベッドのシートとか布団を取ってくるから、待っててくれ。」

「はい。」

俺は、物置と化した二階の左側の一番奥の部屋から必要な物を取って来て、

二人の部屋に運んで、今日と言っ日は終わった。

第23問 悲鳴と俺とやって来た妹と幼馴染（後書き）

今回、将人の妹と幼馴染がやって来ました。

詳しいプロフィールは後で出そうと思っています。

私、WINGは明日から修学旅行に行きます。

なので、下書きが書けないので更新が遅くなるかもしれないです。

第24問 妹と幼馴染と死闘開始

次の日、俺は葵、香奈と一緒に登校していた。すると、途中で明久と会った。

「あ、マサおはよう……って、その二人は？」

「紹介するよ。妹の葵、幼馴染の白崎香奈だ。」

「妹の葵です。よろしくね！」

「白崎香奈です。あなたが将人君の友達の吉井明久さんですね。これからよろしくお願いします。」

「あ、えっと……こちらこそよろしく。」

いきなりの妹&幼馴染の登場で戸惑う明久。まあ、普通の反応だな。

「ねえマサ。この二人はいつ来たの？」

「昨日だ。」

「と言う事は、今日から学校で勉強し始めるの？」

「そういうことになるな。でもまだどのクラスになるかは……いや、Fクラスだな。」

「ふん。じゃあクラスの男子は大喜びだね。」

「多分な。」

その後は、葵、明久、香奈の三人がお互いに質問しあって、学校に着く頃には

すっかり打ち解けて友達同士になっていた。

学校に着くと、葵と香奈は職員室へ俺と明久は教室にそれぞれ向かった。

教室に入ると雄二が話しかけてきた。

「おう、明久に将人。今日は遅かったな。」

妹と幼馴染と一緒に来たと言う事は黙っておこう。

「用事があったな。明久は俺について来て貰ったからだ。」

「用事、か。まあいい。今日はBクラス戦なんだ、遅刻したら地獄を見せてやろうと思っただがな。」

お前、それは友人に言う言葉か？

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ガクガクガク）」

見るよ、明久なんか今までの事を思い出して青ざめて震えまくってるぞ。

「そういうことを軽々しく言うもんじゃないぞ。おっと、先生が来たぞ。」

「冗談だ。さつさと席に着こうぜ。」

そして、福原先生が教壇に上がってHRが始まった。

「えー、皆さん。今日は転校生を紹介します。」

転校生が来たということで、教室内がざわつき始めた。すると、誰かが質問した。

「先生、男子と女子のどちらですか!？」

「二人とも女子です。」

「「来たあああー！ー！つ！！！」」

凄い盛り上がりだ。軽く天井は突き破れるな。

「はいはい、静かにして下さい。えー、では、二人とも入ってきて下さい。」

すると、ドアが開き、葵と香奈が入ってきた。

「えー、では簡単に自己紹介を。」

「はじめまして。伊達葵です。お兄ちゃん共々よろしくね〜!

吉井明久君はこっちに来てからの初めての友達だよ〜!」

「白崎香奈です。将人君とは幼馴染の関係です。よろしくお願いしますね。」

自己紹介終了……かと思ったが、

「困め。」

「了解!!!」

いきなり男子全員（雄二、秀吉を除く）+女子二人が俺と明久を
囲んだ。

な、何て速さだよ。一切無駄の無い動きだったぞ!?

「これより異端審問会を始める。判決、死刑!」

「異議なし!」

判決早っ!

「吉井!あんだ、あんな小さい子と何をするつもりよ!」

「そうですよ!全部話してください!」

「あたしそんなに小さくないよ!」

いや、葵。身長145センチは高校生にしては小さすぎるぞ。

その割には少し不釣り合いな胸があるしな。

「総員、伊達将人の首を獲れえっ!」

「うおおおっ!!!」

「はあ、面倒な事になったな。」

Bクラス戦の前に、俺VSFクラス男子の戦いが始まった。
その様子を、葵と香奈が驚いて見ていた。
すまん、バカばっかのクラスで……。

第25問 過去と今と将人（前書き）

今回は雄二視点です。

第25問 過去と今と将人

SIDE・・・雄二

「まったく。あのバカ共は……………」

こんなつまらない死闘で、試召戦争に悪影響なんか出したくない
つてのに。

「…………将人君、変わったね。葵ちゃん。」

「うん…………でも、何かが違う……………」

すると、伊達（妹）と白崎が何か話しているのが耳に入った。
秀吉にも聞こえたらしく、二人で聞きに行く事にした。

「なあ、二人とも。変わったというのはどついう事だ？」

「それと、何が違うんじゃない？」

「えっと、あなた達は？」

「俺は、このクラスの代表の坂本雄二だ。」

「ワシは木下秀吉じゃ。こつ見えて男じゃからな。よろしく頼むぞ
い。」

「あたしは葵、こつちは香奈だよ。」

「そうか、宜しくな。」

お互いの紹介も終わったので、さっきの質問の続きを聞いた。

「改めて聞くが、何が変わって、何が違うんだ？」

「お兄ちゃん、昔は他人に暴力なんか振るえなかったんだよ。『手を出したら負け』
って言って。」

「向こうにいた時は、ケンカなんて滅多にしなかったけど。小学生の時、苛められていた時期があったけど、絶対に反撃せず、ただずっと我慢して耐えていただけだったんだよ。」

葵と香奈の言葉に俺は驚いた。今と昔の考え方が全く違うからだ。昔のあいつは『ケンカは手を出したら負け』だが今のあいつは『ケンカを売られたら倍にして返す』だからな。

「それと、何が違うんだ？」

「うまく表現できないけど、何かな、こっ、将人君じゃない別の誰かがいる感じがする。」

「むっ……。」

「……なるほどのう。」

意外な過去が明らかになったな。

しかし、白崎の言葉に少し引つ掛かる部分があるな。『将人とは違う誰かがいる』か。

もしかしたら、

「なあ、秀吉。将人がDクラス戦の時不可解な行動を起こしたっていうのは知っているか？」

「そう言えば明久が話していたのう。それがどうしたのじゃ？」

「じゃあ、その後の言い訳は知っているか？」

「『自身の力を過信しすぎた』じゃろう？」

「……不自然じゃないか？あいつのあの時の態度もおかしかった。」

「言われていればそうじゃのう……。」

「何か隠しているのは間違い無いだろう。やはり本人に聞いてみるか？」

「いや。それは止めておいた方がいいじゃろう。そこまでして隠したい事じゃ、

他人がどうこう聞いていいことじゃないからのう。」

「そう、だな。」

「本人が言う時まで待つのが一番じゃろう。」

しかし、将人。一人で抱え込みすぎるなよ。

「ふう。やっぱり手強いな、康太。」

「……………甘く見られたものだな。」

「……………まだまだ、まだ終わらんよ!!」「」

気が付くと、将人が康太と死闘を始めようとしていたところだった。

康太以外の男子は、倒されたらしいが次々とゾンビのように復活していた。

そろそろ止めないと、今日の試召戦争に影響が出始めるな。

「お前ら、いい加減にしろ。今日はBクラス戦があるんだ、無駄な事をしてないで

さっさとテストの用意でもしろ。続きは試召戦争が終わってからにしろ。」

「……………そんな事より、こつちの方が重大だ!!」「」

「ほう、逆らうのか。なら、最前線部隊にして突っ込ませて補習を受けさせるか……………」

「……………補習だけはやめてくれえ!!」「」

やはり、嫉妬心に燃えていても、あの鬼の補習は嫌みたいだな。

「まったくじゃ。つまらない事で設備向上のチャンスを失いたくないのう。」

第25問 過去と今と将人（後書き）

感想をお待ちします！

プロフィール2

名前 伊達葵（だてあおい）

性別 女

誕生日 12月20日

身長 147cm

瞳の色 将人と同じエメラルドグリーン

得意科目 保健体育、物理、化学、数学、英語 大体250点位
物理化学のみ400点以上

苦手科目 世界史、日本史、古典、現国 大体130点ギリギリ

性格 天真爛漫で、将人が近くにいるとすぐに甘える。

特徴 将人と同じ青い髪のセミロング。顔は明ちゃん似（7・5
巻の表紙参照）

重度のブロン。白崎香奈とは友達同士。

体格に似合わず薙刀、槍術を習っていた（兄の影響）
経験がある。身長が低いのが悩み。

父親の影響で化学、物理が好きで、悪戯で将人によく自作
の薬を

飲ませている。

好きな物 兄、友達、面白いもの、甘い物など

嫌いな物 兄をバカにする人、友達をいじめる人、辛い物など。

召喚獣 本人をデフォルメした感じ。秀吉の召喚獣に似ているが武器が十文字槍。

名前 白崎香奈（しらざきかな）

性別 女

誕生日 8月17日

身長 163cm

瞳の色 濃い緑

得意科目 英語、数学、物理、化学、保健体育 大体350点くらい

苦手科目 日本史、世界史、古典、現国 大体200点くらい

性格 明るく優しく、世話好き、お人好し。家事は超が付くほど得意

運動音痴が悩み。

特徴 コバルトブルーのロングヘア。整った顔立ちでかなりの美人。

将人とは幼馴染で、お互いに想いを寄せ合っている（まだ

告白してない)

伊達葵とは友達同士

意外にもゲ-マーで暇があればゲームをしている。

好きな物 将人、友達、甘いスイーツ、可愛いもの、ゲームなど

嫌いな物 将人に危害を加える人、お化け、友達をバカにする人

召喚獣 本人をデフォルメした感じ。右手にマシンガン、左手にシールド装備

服装は迷彩服。一応、アーミーナイフは装備されているが、本人が接近戦を

ほとんど出来ないのほぼ使わない。

第26問 圧勝とBクラス戦と卑怯の気配

SIDE・・・将人

「さて皆、総合科目テスト、ご苦労だった。」

教壇に立った雄二が皆に向かって話している。

「午後からはBクラス戦だが、殺る気は充分か？」

「「「おおーっ！」「」」

士気は全く下がっていない、むしろ上がったほうだ。まあ、俺の事があったからな・・・

しかし、最近、アイツの声を聞かないな。午前中の乱闘の時も出てこなかったし。

「・・・なにを考えてるんだ？すこし警戒しておいた方がいいかもな。」

「今回の戦いは敵を教室に押し込むことが重要だ。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。何としても勝て。」

「「「おおーっ！」「」」

「そこで、前線部隊の指揮は姫路瑞希に取ってもらおう。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります！」

「「「うおおーっ!!」「」」

「なお、部隊には伊達将人も入れる。」

「「「なにいい!(ドサクサに紛れて、殺れるチャンス!)」「」」

「やれるもんならやってみる。手加減なしで補習に送ってやる。」

「「「なに、バレていただと!」「」」

お前らの考える事なんてお見通しだったの。

それよりも戦争だ。まあ、瑞希さんがいるから、あまり出番は無いだろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終わりを告げるチャイムと共に、俺達は一斉に教室を飛び出した。

「よし、行って来い!目指すはシステムデスクだ!」

「「「サー、イエッサー!」「」」

今回の戦いの鍵は敵を教室に押し込む事だ。その為、ほぼ全力で渡り廊下に向かう。

武器は数学だ。Bクラスは文系が多く、担当の長谷川先生の召喚

可能範囲が広いからだ。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

向こう側から、Bクラス、十人程度がやってきて来た。

「さっさと終わらせよう。」

「う、うん。でも僕、大丈夫かな？」

「心配すんな。俺が援護してやるからさ。」

「そうだね。じゃあ、行こう！」

先頭から少し後ろを走っている俺と明久が話していると
前線部隊の先頭がBクラスと先頭を開始した。

Bクラス 中野長男 総合科目 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗 総合科目 764点

終わったな。

Bクラス 金田一裕子 数学 159点

VS

Fクラス 武藤啓太 数学 69点

Bクラス 里井真由子 物理 152点

Fクラス 君島博 VS 物理 77点

勝ち目無いな。

先頭にいた奴らは次々と倒されていった。

「やられそうな奴は下がれ！俺が相手をする！明久、フォロー頼む！」

このままだと、部隊が全滅しかねないので、俺と明久が先頭と交代した。

Bクラス 金田一裕子 数学 156点

VS

Fクラス 伊達将人 数学 387点

「なっ、た、高い！」

「日本史だったら、もう死んでいるぞ。」

と言うと、敵の胴体を二つに切り裂いて倒した。

「Bクラス、里井真由子、伊達将人に物理勝負を申し込みます！」

「マサ！援護するよ！」

Bクラス 里井真由子 物理 149点

VS

Fクラス 伊達将人、吉井明久 物理 226点、59点

物理は苦手だが、Bクラス程度に遅れはとらない。

「くっ、だけど弱い方を狙えば！」

「明久！」

「分かったよ！」

明久に向かってきた敵を、明久が足払いで転ばせ、体勢を崩したところを俺が止めをさした。

「よし、明久。ナイスコンビネーション！」

「僕もこれくらいはね。」

「お、遅れま、した。ご、ごめん、な、さい。」

すると、後ろから瑞希さんが息を切らしながらやってきた。ちょっと大変そうだな。

「瑞希さん。無理なら、俺が代わるが？」

「い、いえ。大丈夫、です。私にやらせて下さい。」

ここまで言うんだ、素直に引き下がろう。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子、Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

「あ、長谷川先生、Bクラス菊入真由美も数学勝負を申し込めます

「！」

少ない人数なのに、二人ががりが。よっぽど倒してしまいたいだな。

仮に倒せたとしても、俺がいるからどつちにしろ全滅は免れないが……。

「……試^{サモン}獣召喚！」

Fクラス 姫路瑞希 数学 412点

VS

Bクラス 岩下律子、菊入真由美 数学 189点、151点

「おつ、腕輪付きか。じゃ、勝つのも同然か。」

「ねえ、腕輪って付くとどうなるの？」

「特殊能力がつくはずだ、効果は召喚獣によって能力は様々、ただし400点以上取らないと付かないし腕輪によっては大量の点数を消費するものもあるらしい。まあ、必殺技ってところだな。」

「へえ。でも、僕なんか400点以上なんて無理だね。」

「……諦めるのは良くないぞ。勉強すれば今よりはずっと強くなれるはずだ。ただ、それをするのは明久次第だ。まあ、俺も出来る限りサポートはする。」

「……………そうだね。僕も頑張るよ。」

お互いに友情？を確かめ合っていると、

Bクラスの一人は腕輪から放たれた光線で消し炭になり、もう一人は、大剣で真つ二つにされた。Bクラス、残り6人。

「くっ、後退するぞ！」

「よし、Bクラスを押し込め！」

「くっくっくおおーっ！」「くっく」

瑞希さんのお陰で、最高まで士気が上がった。

「明久、将人。ワシらは教室に戻るぞ。」

「ん？何で？」

「明久、Bクラスの代表は……………根元恭二だ。」

「あの、根元恭二！？」

根元恭二、コイツはとつもない卑怯者として知れ渡っている。

カンニングの常連、ケンカに刃物は当たり前、目的のためには手段を選ばずなどの噂だ。

俺の大嫌いな部類に入るクソ野郎だ。

「急いだ方がいいじゃろう。」

「……………もう手遅れだと思うがな。」

俺達は急いで教室に戻った。

第27問 人質と参加と地味な嫌がらせ

「……うわ、これは酷い。」

「まさかこうくるとはのう。」

俺、明久、秀吉が教室に戻ってきて見たものは、へし折られたシヤーペンと

穴だらけにされたちゃぶ台だった。

「あの……クソ野郎……。」

「これじゃあ補給がままならないよ。」

「うむ、地味じゃが、点数に影響がでる嫌がらせじゃな。」

「気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に支障は無い。」

雄二が割り込んで話してきた。

「なんでお前がいながらこうなった？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために留守にしていた。」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着が付かなかった場合、続きは明日の午前九時に持ち越し。」

その間、試召戦争に関わる行為は一切禁止する。ってな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

こっちとしては、瑞希さんと俺の状態が万全で、しかも敵は教室に押し込められている。

Fクラスが有利すぎる状態だ。

しかし、

「なあ雄二。どうにも裏があるような感じなんだか……。」

「俺もだ。だが、今回はクラス全体より、姫路やお前のような個人の戦闘力が重要だ。

でも、一応、警戒はしておいてくれ。」

「御もつともだな。さて、前線に戻るか。瑞希さんと交代した方がいい。」

俺達は教室を飛び出し前線に戻っていった。

秀吉と別れ、それぞれの部隊に戻った時、

「吉井、伊達！戻ってきたか！」

なぜだ？ここの指揮は島田のはずだが？

「おい、島田はどうした？」

「その事なんだ。……島田が人質にされた。」

「「なっ!?!」」

代表が卑怯なら、配下も卑怯だな!

「……とりあえず状況を見に行こう」

「それなら前に行こう。敵は道をふさいでる。」

人垣を抜けると、Bクラス二人と捕まっている島田さんと召喚獣がいた。

近くには、英語の先生がいる。

「島田さん!」

「よ、吉井!」

感動の再開はまだ早いぞ。

「動くなよ、こいつを補習室送りにするぞ。」

「くっ……。。。」

「ちっ、代表が卑怯なら子分も卑怯だな!」

「うるさい!俺達だって補習室送りは嫌なんだよ!」

かなり追い込まれてるらしい。何を仕出かすか分からんぞ。お互いに睨み合っていると、

バババババツ！

突然、二人の後ろから、銃声が聞こえ、一人が穴だらけにされた。

「な、何だ！？」

慌てて後ろを向くが、向いた瞬間、十文字の槍に突き刺された。

「もう。女の子を人質に取るなんて、最ッ低！」

「ホント、男の風上にも置けないわ。」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「でも、間に合ったみたいだね、香奈ちゃん。」

「そうだね。あつ、大丈夫ですか、島田さん？」

Fクラス 伊達葵 英語W 246点

&

Fクラス 白崎香奈 英語W 357点

やって来たのは葵と香奈だった。

「あれ？二人は今日は参加出来ないんじゃないやなかったの？」

「それがね、練習してたんだけど先生が『もう教えなくても十分、実戦で対応できます！』

って言って、すぐに終わったの。」

「そうか。不意打ちとはいえ確かに上手だな。」

銃火器を扱う召喚獣は初めて見たが、遠くからしかも人質に当てずに撃つなんて相当難しいぞ。

「それよりも、島田さんはどうして捕まったの？」

「それは『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したから……。」

「……なんか、うれしいのと悲しいのを半分ずつ感じるよ……。」

「って言うか、パンツ見て鼻血出たってどんだけエロいんだよ……。」

「へえ〜。」

「葵ちゃん、もしかして……。」

二人が島田をジーっと見ている。

「な、何？二人とも、なにか付いてる？」

「「何にも、ただ、『頑張ってるね』。」」

「ちよ、からかわないでよー！」

なんだ、島田の気持ちに気付いたのか。

それにしても、図星を付かれて顔が真っ赤だぞ。まあ、頑張りな。

その後、廊下での戦いが終わり教室に戻った。

第27問 人質と参加と地味な嫌がらせ（後書き）

こんにちはWINGです。

実は、私、三作品目を投稿してしまいました！

作品名は『IS 織斑一夏ともうひとり』です。

時間があるようでしたら、そっちの方もよろしくお願いします。

感想お待ちしてます！

第28問 罖と強行突破と大乱闘 前編

SIDE・・・将人

「おっ？四時だ。休戦だな。」

すると、康太が雄二に何かを話していた。

「どうした？」

「Cクラスが試召戦争の準備をしている？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

どうやら、情報収集で得た情報を雄二に報告していたようだ。

「漁夫の利、か。小賢しい奴らだな。」

「Cクラスの奴らと協定を結ぶか。Dクラスを使って攻め込むぞ、
と言って脅せばいいだろう。」

「そうだね、じゃあ早速・・・・・・・・・・」

俺も行くこととしたが、重大な事を思い出し止めさせた。

「待て。雄二、協定の決まりは、

『明日まで試召戦争に関する一切の行動を禁ずる』だよな？」

「あ、ああ。そうだが？」

根元のアイツがこれを利用しないはずがない。

「根元がこんなチャンスに逃すはずがない。もしCクラスと協定を結んだら必ず

『協定違反だ』とかいって攻め込んでくると思う。」

「……………言われてみればそうだな。」

「どうするんだ？このままCクラスに攻め込まれるのを覚悟で続けるか？」

正直それは勘弁してほしい。俺や瑞希さんが戦えたとしても、袋叩きで終わってしまう

「いや、もしもの時にしようとしていた作戦を実行する。」

ほう。もう対策があるのか。

「どんな作戦なの？」

「詳しく言つと。」

「……………！！盗聴の気配。」

康太が言つと、廊下のほうで走り去る足音が聞こえた。

「追うぞ！作戦がバレると厄介だ。」

「了解！」

すぐに俺、明久、雄二、瑞希さん、島田、康太、秀吉、葵、香奈、須川が廊下に飛び出し追いかけた。

見ていた奴は教室に逃げ込んだらしく、俺たちも中に入った。

「おやおや、Fクラスの皆さん。ここに何の用かな？」

「えっ……根本……君？」

明久が理解できないという感じで言った。

そこには、短く刈り揃えられた黒髪に無精髭が特徴の根本恭二がいた。

「ここはCクラスだ。協定の内容は『試召戦争に関する一切の行動の禁止』だったな？」

協定違反だぞ。」

「……ちっ。」

雄二が舌打ちをした。多分、分かったのだろう。

さっきの奴は恐らくCクラスの奴だ。あいつらは試召戦争の準備のために

偵察をしていたのだろう。だが、本当の目的は俺たちをここにおびき出すことだ。

ここに来させれば、協定違反として戦闘が認められる。

もうCクラスはBクラスと手を結んだと考えないと。

「と、言う事だ。いいですね先生？」

すると、数学の長谷川先生が出てきた。他にも、Bクラスの生徒が出てきた。

くそっ、完全に畏にはまった！

「Bクラス芳野が召喚を……」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試獣召喚」サモン

雄二への召喚を須川が間一髪で受けて立った。

「逃げるぞ！」

雄二の号令で一斉に廊下に出たが、

「ダメじゃ！完全に逃げ道を塞がれておる！」

Fクラスに向かう廊下にはBクラスの奴らが塞いでいた。

ここは、無謀だが、

「強行突破するぞ！試獣召喚」サモン

キーワードを言って俺は召喚獣を喚び出した。

「………試獣召喚」サモン

雄二以外のみんなも召喚獣を喚び出した。

「須川を助けてくる！少し待っててくれ！」

「お兄ちゃん、あたしも行く！」

俺と葵は一旦教室に戻った。

第28問 畏と強行突破と大乱闘 前編（後書き）

将「おい作者！なんかとても大変なことになってるぞ！」

W「何か、某超人格闘アニメとか、某パワードスーツバトルアニメとか

某ガンアクションアニメとか見てたら、バトルを書いてみたくなってさ。」

将「……………それ、にじファンにあるし、お前今、そのアニメのヤツ

そこで連載中だろ。」

W「あ、バレた？」

将「んで、どうなるの、これ？」

W「実は、これ三つに分かれてるんだ。」

将「マジで!?!」

W「長すぎてさ〜三つに分ける事にしたんだ。

ちよつとグダグダな展開になるかも……（汗）」

将「俺、どうなるんだろ……（汗）」

W「う〜ん、もうちよつと下書きを書き直すべきかな。では」

W&将「次回をお楽しみに！」

W 「感想をお待ちしてまゝです！」

第29問 畏と強行突破と大乱闘 後編

「須川！助けに来た！廊下に出て明久たちと合流しろ！」

「す、すまん。こっちはもう戦えねえ！」

Bクラス 芳野薫 数学 165点

VS

Fクラス 須川亮 数学 10点

あの点数さ相手に結構頑張ってくれたな。

「俺が相手だ！」

「あたしも！」

Bクラス 芳野薫 数学 165点

VS

Fクラス 伊達将人、伊達葵 数学 378点、299点

俺と葵との連携に一人倒した。

そして、教室にいる根本を睨みながら言った。

「根本、このケリは明日決めてやるからな……。」

「卑怯者は大ッ嫌い！明日ボコボコにしてやるからね！」

怒りを含ませながら俺と葵は言い放った。

そしてすぐに廊下に戻った。

SIDE・・・明久

「ここは持ち堪えてくれ！」

マサは須川君を助けに戻った。

「全員！白崎と姫路を中心とした陣形で戦え！」

雄二が指示をだし、みんなが陣形を変えていく。すると須川君が教室から出てきた

「須川君！よく無事だったね。」

「ギリだったけどな。将人もすぐに来るそつだ！」

マサが来れば何とかなるだろう・・・

「きゃあっ！！！」

「島田さん！？」

Fクラス 島田美波 数学 64点

島田さんが敵の力押しに負けて攻撃を受け、点数が大幅に減ってしまった。

しかも、敵は止めを刺そうと剣を振り上げていた。

「させるかっ！試召喚^{サモン}！」

Fクラス 吉井明久 数学 51点

VS

Bクラス 工藤信二 数学 128点

ガキンツ！ バキイツ！！

とつさに島田さんの間に割り込み攻撃を木刀で受けた。しかし、点数が低すぎてこっちの武器が折れてしまった。危険と判断してバックステップで一度距離をとった。すると島田さんと姫路さんが駆け寄ってきた。

「よ、吉井君！大丈夫ですか！？」

姫路さんが敵を倒してくれたが、

「かなりまずいけど、何とか……………」

Fクラス 吉井明久 数学 3点

「ゴメン、ウチがすっかりしてなかったから……………」

島田さんが申し訳無さそうに言うが、それはこっちの台詞だ。

普段から、きちんと勉強していれば島田さんを援護できたはずなのに……………」

「お互い様だよ。それよりもここを抜け出さないよ。」

しかし、もうこっちは点数が無いに等しい。どうすれば……………」

。

「すまん！待たせたな！」

すると、マサと葵がやって来た。
ここから反撃だ。

第29問 畏と強行突破と大乱闘 後編（後書き）

将「なんだこのグダグダの展開はあつ！！」

W「本ツ当にすみません！書いた自分でも『グダグダ過ぎる』と思
ってました。」

将「はあ、で、これ次で終わり？」

W「うん。次で終わる予定。でもBクラス戦は続くよ。」

将「もう一踏ん張りかあ。無事に戦死せずに生き残れるかなあ……
」。

W「案外、戦死するかもね。」

将「冗談だと信じてる……（汗）」

W & 将「次回をお楽しみに！」

第30問 救出と決着と戦死

S I D E . . . 将人

来ると、酷い事になっていた。
まず、みんな点数が無い。しかも明久なんか武器が壊れてしまっている。

「こうなったら、俺が突破口を開く！」

俺は敵に突っ込み、進路を塞いでいた召喚獣二体を吹き飛ばした。

「今だ！走って逃げろ！」

開いた所からみんな脱出した。と思っただが

「大変じゃ！明久と島田が取り残されておる！」

「なんだと！」

手負いの明久と島田は逃げ切れなかったみたいだった。

「くっ、助けに行く！」

「ワシも行こう！」

秀吉が一緒に来てくれるみたいだった。

「将人君！無茶だよ！私も行く！」

「お兄ちゃんあたしも！」

すると、葵、香奈も来てくれた

「将人君、わたしも……。」

「瑞希さん。雄二の護衛を頼む！それに点数がないだろう。」

「……分かりました。」

瑞希さんは雄二と共にFクラスに戻っていった。

「突っ込むぞ！」

「了解（じゃ）！」

再び敵の中に戻り、囲まれていた明久たちと合流した。

「明久、島田。逃げろ、ここは俺たちが引き受ける！秀吉、明久と島田を援護して

教室まで連れてってくれ！」

「了解じゃ！そちらも無事での！」

俺たちがあけた穴から明久、島田は秀吉に連れられて脱出した。

「さて、準備はいいか？」

「もちろん！」

「いつでもいいよ、将人君！」

「行くぞ！」

そのから、俺と葵、香奈で時間を稼ぐ、とても分の悪い戦いが始まった。

点数が無いので、敵にダメージが与えられない。これもきつい。

二、三分後

「お兄ちゃん。もう……無理……」

「将人君、わたしも……」

すっかり点数がなくなり極限の状態で戦ってきたが、限界のようだ。

「もういい。二人だけでも逃げる……」

「無理だよ。囲まれてる……」

「……敵の注意を俺に引き付ける。その間に逃げる。」

言っと、俺は敵の召喚獣に向かって走り出した。

突発的な行動に、Bクラスの注意は俺に向けられた。

そこに、葵と香奈が隙を見て脱出した。

「お兄ちゃん！早く！」

「将人君！」

「構うな！逃げる！」

二人はまたこっちに来ようとするが、逃げるといって止めさせる。

「……分かったよ。絶対帰ってきてね！」

「将人君、無事でね……。」

二人は教室に撤退し始めた。

「逃がすな、追え！」

「そうはさせんぞ。」

追撃しようとする向いた奴らを蹴飛ばし、葵たちが逃げていった方向に立った。

「誰も通さない。俺を倒してから行くんだな。」

「くそつ、まずはこいつから倒せ！」

歴史で言う、弁慶のような戦いが始まった。

ヒュン！ ガキン！（敵の剣を防いだ音）

ブン！ ガキン バキン！ （敵のハンマーを防いで刀が折れた音）

刀で攻撃を受け流していたが、刀が折れた。どれくらい戦ったか分からないほど戦った。すると妙な違和感を感じた。

「（なんだ？アイツが喜んでる？あいつの力が強まっていく・・・マズいな）」

ヒュン！ スバアッ！（召喚獣が切られた音）

「しまった。」

Fクラス 伊達将人 数学 2点

もう無理だな。ここまでか・・・後ろを見ると、二人がかなり遠くにいた。

「もういいか・・・。」

俺は刀を納めた。

「・・・好きにしろ。もう戦う力はない。」

「そうさせてもらおう。」

そう言うと、敵の召喚獣の剣が俺の召喚獣を貫いた。俺の戦死が確定した。

第30問 救出と決着と戦死（後書き）

将「作者アアア！何だよ、このグダグダな展開はアアアッ！」

W「ギヤアアアッ！落ち着いて、落ち着いて……。」

将「落ち着けるかつ！しかも俺、戦死してるじゃねえか！」

W「そういう展開のほづが面白いかな？つて、思ったんだもん。」

将「……歯ア食いしばれよ……。」

W「えつ、ちよつと、や、やめ……ギヤアアアアアッ！
！」

作者、将人の怒りにより半殺し&気絶中

将「とにかく、次回をお楽しみに。」

W（から出てきた白い煙）『感想もお待ちしてまゝす。』

第31問 補習と帰り道と作戦決行

SIDE・・・明久

「雄二、早く助けに行かないと！マサたちを見捨てる気なの！！」

僕は雄二に怒鳴っていた。僕達を助けて時間稼ぎのために残ったマサ、葵、香奈さんを助けに行こうと雄二に言ったが、雄二の答えは『NO』だったからだ。

「ダメだ。アイツらを助けにはいけない。」

「何でだよ！」

「今のお前が行って、あいつらを助けられるのか？」

「くっ・・・・・・・・」

当然の事を言われ、反論できない。

今の僕の状態じゃ、行っても助ける事は出来ない。

今更、僕の勉強不足、力不足が悔やまれる。

「俺だつて助けに行きたいさ。だが、代表と言う立場上、不用意に戦闘に参加するわけにもいかない。

他の奴らはほとんど帰っちゃったし、

残ってる奴を含めても勝てる見込みは無い。」

「今は、伊達たちが無事に帰ってくる事を祈るだけね・・・・・・・・。」

「そうじゃ、それに将人がそう簡単にやられんじやろう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・信じるしかない。」

「大丈夫だと思いますよ。とにかく待ちましょう。」

みんながそういうのだから仕方ない。信じて待とう。

何分かつたとき、当然扉が開いた。そこに立っていたのは

「葵に香奈さん！？大丈夫なの！？マサは！？」

葵と香奈さんだった。かなりの激戦だったらしい。二人とも疲れきっている。

「落ち着いて明久君。今、全部話すから・・・・・・・・。」

葵はそう言って、教室にいるみんなに話し始めた。

「大事な事を先に言うね。・・・・・・・・お兄ちゃんは戦死したよ。」

えっ？

いきなりのマサの戦死に言葉が出てこない。

みんなも信じられないと言う顔をしている。

話している葵も香奈さんも、落ち込んでいるのが分かる。

「今日は遅いから補習は無いと思うけど、明日からは補習室行き。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・僕が悪いんだ。僕がしっかりしていれ

ば……」

「はあ。明久。自分の失敗を責めるのは良くないぞ。」

声が出た方を向くと、扉のところにマサが立っていた。

SIDE・・・将人

「……僕が悪いんだ。僕がしっかりしていれば……」

教室に入ってみるとお通夜のような空気だった。

しかも、明久は話の様子から俺の戦死は自分のせいだと思ってるらしい。

「はあ、明久。自分の失敗を責めるのは良くないぞ。」

あまりにも暗く重い空気だったので、わざと明るめの口調で言った。

すると明久がこっちに来た。

「マサ、ゴメン！僕が勉強していれば足を引つ張らなかったのに……」

「もういいって明久。別に戦死した事は気にしていないし、これから勉強していけばいいだけだろう？」

「でも……」

「Bクラスの奴らに今日の悔しさをぶつけなければいい。事はそれからだ。」

「将人の言うとおりだ。まずはBクラス戦を終わらすぞ。ところで将人、Bクラスの連中はどうした？」

「奴らは今日もう来ないと思う。点数を削っただけだから全体の数はそんなに減ってないはずだ。それに、先生のほうからも停止の宣言が出た。」

もうすぐ門限だからだろう。」

「そうか分かった。」

雄二は作戦を考えているようだ。その前に、

「Cクラスはどうする？作戦はばれてしまったんだらう？」

「その事なんだが、俺はBとCどちらに仕掛けるとは言っていない。奴らはどっちに仕掛けて来るか分からないはずだ。」

確かに、作戦の一番大事なところを言ってなかったな。

「詳しい事は明日だ。今日は遅い、さっさと帰るぞ。」

雄二の言葉で今日は解散となった。はあ、明日、俺はどうなるんだらうか……。

帰り道、途中まで五人で帰っていたが別れて、今は三人で帰っていた。

「将人君。明日から補習だね……………」

香奈が明日の補習の事を言ってきた。

「ああ、そうだな。」

「噂なんだけど、補習を受けた人はみんな変になって出て来るんだって……………」

「大丈夫だ。心配するなって。耐えて見せるさ、なあ葵?」

「……………」

葵に聞いてみたが返事が無い。

「葵?」

「……………うん?……………あっ、ゴメン。眠くて聞いてなか……………た……………」

眠くて話を聞いてなかったらしい。今日は初めての試召戦争で、あんな激戦をしたんだ。疲れても仕方ないな。

「今日はよく頑張ってくれたからな……………よっど。」

とても眠そうにしている葵をおんぶした。

「ありがとう……………お兄……………ちゃん……………」

すると、すぐに寝てしまった。相当疲れていたらしい。

「ご苦労さん、葵。」

「いいなあ。葵ちゃんは。」

香奈が羨ましそうに見ている。

「香奈も今日はご苦労さん。家で何か作ってあげるよ。」

「やった。嬉しい！」

色々話しながら、家に着いた。

その後、香奈の好きな料理（＝俺の手料理）を作った。

なぜか葵はいつの間にか起きていたが。そして今日はすぐに寝た。

明日は、あの地獄の補習だ。気を引き締めよう。

第32問 挑発とヒステリックと地獄へGO!

SIDE・・・将人

俺はいつものように登校して、教室にいる。

補習は戦争が再開してからだそうなので、とりあえず最期（誤字にあらず）のひと時を過ごしている。

「それじゃ、昨日言っていた作戦を実行するぞ。」

「まだ開戦前だから、Cクラスが相手か。」

「具体的には何をするの?」

「コイツを秀吉に来てもらう。」

取り出したのはこの学校の女子用の制服。

雄二、なんでお前が女子の制服を持ってるんだ?

「まさか雄二。お前、女装が趣味だったり……………」

「ち、違う!断じて違う!ちょっとしたツテで借りてきたんだ!」

「ならいいが……………」

「それで、これを着てワシは一体何をすればいいのじゃろうか?」

まったくだ。女物を男の秀吉が着るなんて、だたの罰ゲームにし

かならんぞ。

一部の奴らには至福の時間らしいが。

「木下優子に化けて、Aクラスの使者を装ってもらう。」

Aクラスの圧力をかけてやるのか。小山の奴の反応が面白い事になりそうだな。

「と言っわけだ。秀吉、用意してくれ。」

「う、うむ……………」

制服を受け取るとその場で着替え始めた秀吉。

明久は完全に見とれてしまっている。康太は…………言っまでも無く写真を取ってる。

二人とも、せめて鼻血を止めて、本人から見えない所でそういう事はしようよ…………。

「よし、着替えは終わったぞい。ん？皆どうしたのじゃ？」

それは秀吉の生着替えに見とれてたんだと思う。

「さあ？ それよりCクラスに行くぞ。」

「Cクラスの奴らの反応が楽しみだ。ふ、ふふ……………」

「マサからドス黒いオーラが！？」

何の事だい明久？

奴らが驚いて混乱するところを想像すると…………笑いが堪えれね

えんだよお！

そんな感じでCクラスの前まで来た。

「さて、ここからは一人で頼むぞ秀吉。」

「気が進まんのう……。」

そりゃそうだな。姉のふりをして騙すなんて、もし本人が知ったら……。

おそらく、血の雨が降る。確実に……。

「そこを頼む。奴らを上手く挑発してAクラスに敵意が向くようにしてくれ。」

「むう……仕方ないのう……。」

何とか了承してくれた秀吉はCクラスに入ってしまった。そして、

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

と入って早々、聞いただけでこの作戦が成功してしまうであろう台詞を言い放った。

「これ以上に無い挑発だね。」

「流石だ秀吉。」

「『薄汚い豚ども』って……く……く……く……。」

『な、何よアンタ!』

この高い声は、小山だろう。ありゃあ、相当怒ってるぞ。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

豚臭いってなんだよ……。

『アンタ、Aクラスの木下ね? 点数がいいからって調子に乗るんじゃないわよ!』

何の用!』

怒って、秀吉か姉の木下優子かを見分けないみたいだな。

もつとも、見分けるのは結構難しいがな。

『私はね、こんな醜くて臭い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!』

貴方達なんて豚小屋で十分だわ!』

『なっ! 私たちにはFクラスがお似合いですって!?!』

誰もFクラスって言ってないだろ!?! 何でFクラス!! 豚小屋なんだよ!

『手が穢れてしまうのは本当は嫌だけど、ちょうど試召戦争の準備もしてるみたいだし』

近いうちに、私たちが貴方達を相応しい教室に送ってあげるから、覚悟してなさい。』

そして、ピシヤリと扉を閉めて秀吉が出てきた。

「これでいいのかのう?」

「いい演技だったぞ。」

「おまけに、ストレスの発散にもなったみたいだな。」

Cクラスからは、

『Fクラスなんてどうでもいいわ! Aクラス戦の用意をするわよ!』

小山の奴のヒステリックな叫びが聞こえる。

くくく、ざまあみやがれ。

「もう、こんな時間か。そんじゃ、俺は補習室に逝くわ……」

「なるべく、マトモな状態で戻って来いよ。お前がおかしくなったらこっちとしても困る。」

多分、無理。

「……努力はしよう。」

「それじゃあね。」

「明久、お前まで来るんじゃないぞ。」

俺は一人、補習室に向かった。

第32問 挑発とヒステリックと地獄へGO！（後書き）

W「すみませんでしたあああー！ー！」

将「遅いんだよ！」

W「夏休みの課題が多くて多くて、書いている暇が無かったんだよ！」

将「もっと速く書けるように努力しろ。」

W「精進します。」

将「というわけで、やっとの更新です。」

W&将「次回もお楽しみに！」

第33問 地獄と怒りと黒いモノ

SIDE・・・明久

「ドアと壁を上手く使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

現在、午前九時。昨日のBクラス戦が再開された。

雄二からの指示は、『敵を教室に閉じ込める』とのこと。

僕達は指示通り戦闘をしているのだけど、問題が発生した。

姫路さんの様子がおかしい。

本来なら総司令官の立場なので、みんなに指示を出さないといけなのだけど、

今日は一向に指示を出さない。そもそも戦争に参加していないように見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

「危なくなったら下がって補給に行って下さい！残っている人はこのまま頑張って！」

仕方がないので、確実に敵を閉じ込めるために右側を秀吉、左側を葵、香奈が指揮を取っている。

ここ数時間は指示とおりに頑張っている。

正直なところ、マサがいれば一気に突破して倒せるのになあと思っていた。

ダメだ。頼りすぎはいけない。自分たちで乗り切らないと。それにしても、

「マサ、大丈夫かな？」

S I D E . . . 将人

「出してくれえええっ！」

「嫌だアアアツ！出してくれえええっ！」

補習開始から数時間、ここは地獄と化した。

何故こうなったかというと、補習開始まで遡る事になる。

数時間前。

「これより、補習を開始する。くれぐれも逃亡などを起こさんようにな。」

補習が始まると。問題集が一冊渡された。

「（思っていたより普通だな。まあ、西村先生が監督するのはキツイけど。）」

と俺は思っていたが、この後、地獄と化した。

すると、西村先生は戦死者が出てないのに教室を出て行った。

「（なにがあったのだろうか？）」

数分後、部屋のスピーカーから何か音が流れ始めた。何々、

『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎。趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎。』

西村先生の暑苦しい声で同じ事が繰り返され始めた。

「「「「ギアアアアアアアアツ！」「」「」

「こ、これは、かなり苦しい……。つーか、これって教育機関で行って良いことなの！
ほぼ洗脳じゃねえか！

「嫌！聞きたくない！止めてくれええ！」

「出してくれえええツ！」

地獄絵図の完成。俺も、必死に耳を塞いで正気を保とうとしている。

隣の奴は、机に何か書いている。何々、『殺して殺して殺して殺して……』もうダメだ。

コイツはもうダメだ助からない。壁に頭をぶつけて頑張る奴もいる。末期だ。

これが、鬼の補習の全容。

現在。

正直、俺もそろそろ限界。

（ギアアアアアアア！）

アイツまで苦しんでる。明久、出来れば早く終わらせてくれ……。

S I D E . . . 明久

「？」

「どうしたのじゃ、明久？」

「今、マサの叫びが聞こえたような．．．．。」

「．．．．花を買ってくる必要があるそうじゃのう．．．．。」

「何て事を言っただ秀吉！まだマサは死んでないからね！」

「．．．．多分。」

「左側の人数が少なくなってきた。誰か援護して！」

「左側から葵の援護要請が聞こえた。」

「私が行きます！」

「姫路さんが駆け出したが、」

「あ．．．．。」

「急に止まって俯いてしまった。」

「何かを見て動けなくなっただけだ。」

「視線の先には、根元恭二（ねもと けいじ）がいた。」

「そしてその手には、」

「！！！！」

数日前に姫路さんが放課後、恥ずかしそうに隠していた封筒があった。

そういうことか。あのクズは条約を提案した時からすでに姫路さんを無力化する算段が立っていたって訳か。

だんだん怒りが込み上げてくるのが分かる。
畏にはめてマサを戦死させただけでなく姫路さんの大事な物で脅すなんて……。

「姫路さん。具合が悪いみたいだから後ろに下がっていて。」

怒りを抑えて、姫路さんに後退を頼む。

「えっ、でも……」

「お願いだ。後ろに下がっていて。」

少し語気を強くして言う。

「はい……」

「僕は用があるから行くね。」

正直、これ以上怒りを抑えるのは無理だ。

(あのヤロウ！ ブチ殺す！！)

そう、心の中で叫んだ時、

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

何か、とてもドス黒いモノが渦巻く感じがしたが、僕はそれに気付いてなかった。

これの正体に気付いたのは、この戦いが終わってからだった。

第33問 地獄と怒りと黒いモノ（後書き）

W「将人、頑張るねえ〜。」

将「ギヤアアアアア！」（鬼の補習中）

W「もうしばらく頑張ってね。Bクラス戦が終われば出してあげるから。」

さて、柄にも無く明久君が怒ったねえ。

どう影響させようかな〜？」

W「次回をお楽しみに！ 感想と意見をお待ちしてま〜す！」

第34問 協力者と豹変と意思世界

SIDE・・・香奈

雄二君の指示通り、入り口を塞いで数時間が経ちました。すると、ちょっとした問題が起きてしまいました。

「ねえ、葵ちゃん。瑞希さんの様子、変じゃない？」

「うん。指示は出さない、戦闘に参加しない。どうしたんだろ？」

と言うわけで、今は左側の入り口の指示を取っています。

でも、状況はよくありません。点数に差があるので、すぐに点数を削られてしまい補給に行くしかなくなるので、少しずつ人数が減ってきてしまいました。

「左側の人数が少なくなってきた。誰か援護して！」

ちょっとピンチみたいなので、葵ちゃんが援護を要請しました。

「私が行きます！」

どうやら、瑞希さんが来るみたいのようでしたが、

「あっ・・・」

立ち止まってしまいました。何があったのでしょうか？

視線の先には、根本とその手に握られている封筒。

封筒？　もしかして……………。

すると、明久君が何やら瑞希さんと話をして教室の戻っていきま
した。

私と葵ちゃんは瑞希さんのところに行きました。

「ねえ、瑞希さん。あの封筒の中って、明久君宛ての？」

「はい……………。」

やっぱり、瑞希さんは明久君のことが好きみたいです。

「何で根本が持つてるの？」

葵ちゃんが少し怒っているような言い方で聞きました。

「実は……………数日前に落してしまっただんです。探していたのです
けど……………」

まさか根本君が持っているなんて……………」

瑞希さんがそう言った声は少し震えていた。

最低。根本、あんた最低の男だわ！

「……………許さない、絶対に許さない。行こう。」

「行ってくつて、どこに？」

「雄二君とこ。根本の奴に一泡吹かせてやるんだから！」

確かに、この前の仕返しもありますけど、

「だめだよ。ここを離れちゃ。私たちはここから出来るだけのことをしよう。」

「でも……………」

「大丈夫だよ。明久君なら必ず取り戻してくれるよ。」

「……………うん。分かった。」

そう言って、私たちは、持ち場に戻りました。

SIDE・・・明久？

「雄二イイツ！」

「うん？脱走か？チョコキでしばいて……………うおっ！」

ちよつとした冗談のつもりだったのだろうけど、

今の俺にはフザケと見えてしまい、雄二の胸倉を掴み挙げていた。

「今すぐ、あのクソ野郎ねせしを殺したい！！ 手を貸せっ！！！」

「お、落ち・・・着けっ！ あと・・・手を・・・離せ、く、苦しい・・・まず話からだ。」

言われたとおり、まずは手を離した。

「はあっ、はあっ……………それで、根本のやつに一泡吹かせてやりたいのか。」

まだ、頼みたい事がある。これを断るなら、雄二だって容赦しない。

「姫路瑞希を戦線から外せ。」

「っ!」

雄二が息を呑むのが聞こえた。断る気か？

「……分かった。但し、条件がある。」

「何だ……?」

早く言え。

「姫路がするはずだった役目をお前がやれ。なんとしても成功させる。」

「いいだろう。やってやるよ。俺は何をすればいい?」

「っ! タイミングを見て奴に攻撃をしる科目は何でもいい。」

「助けは?」

「ない。出入り口は今の状態のままだ。」

「ちっ、戦闘は教室の二つの扉で行われている。つまり常に一对一だ。」

奥にいるクソ野郎に近づくには、一気に邪魔な奴を消す力が必要だ。

生憎、俺にそんな点数はない。

面倒だ、Dクラスかの壁をブチ破って行くか。
BクラスとDクラスは隣同士だ、出来るはずだ。

「……………Dクラスに指示を出してくる。」

そう言って雄二は教室を出て行った。

S I D E . . . 雄二

俺は今、とても驚いていた。

明久のあの変わり様だ。

「（どうしたんだ明久！？ 自分のことを『俺』と呼ぶなんて。それに、姫路の事をいつものように『姫路さん』ではなくフルネームで呼んでいた。）」

怒りで我を忘れているのか？ いやそれなら話なんて出来るはずがない。

「しばらくすれば、怒りも静まって元に戻るかもしれないな。」

今は、下手にアイツを刺激しないほうがいいだろう。

「将人じゃあるまいし、一体どうし……………将人？ そういえばアイツも似たような事
があった気がする。何か知ってるかもしれないな。」

補習から戻ってきたら聞こう……………無事ならな。

S I D E . . . 将人

俺は机に突っ伏していた。

「 もう無理 」

意識が飛びかけていた。ちなみに俺以外の奴らはと言うと、

「趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎。趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎 」

と、もう完全にイッている。目が虚ろだ。

とうとう意識が飛んでしまった。そして真っ白な空間に来た。

「 人の意識が集まっている ? 」

ここは、どこ? ? ? っていうか人意識が集まるところにいるって、俺もうダメなのか! ?

などと、考えてるとたくさんの人意識の中にドス黒い塊がある事に気が付いた。

近づいてみると、

「うっ、何だこれ . . . ? 怒り? 誰の意識だ? 知っている人の感覚だが 」

詳しく調べるために中に入りろうとしたが、

バチバチバチィッ!!

「うわぁっ!?!」

鋭い電流が流れ、弾き飛ばされてしまい俺の意識が真っ白の空間から出て行き体に戻った。

第34問 協力者と豹変と意思世界（後書き）

W「なんか、将人と明久が人じゃなくなつてく……。
などと思つている作者です。」

将「……………（意思世界に飛んでいる。）」

W「……………早く目を覚ましてね。さもなど、明久が君と同じ
過ちを起こすかもよ……………」

W「次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてまゝです！」

第35問 完全暴走と困惑と殺意

SIDE・・・美波

補給テストを受けていると、吉井が荒々しく入ってきた。

普段のアイツからは想像出来ないくらい殺気立ってる。なにがあったのだろう？

しばらく坂本と話し合い、坂本が教室を出て行くと、吉井がうちのほうに来た。

「島田。あと・・・須川に君島。俺に協力しろ。」

「!?!」

言葉を失った。吉井が自分のことを「俺」って呼ぶなんて・・・。

「ど、どうしちゃったの!? 『俺』って・・・。それに協力って・・・。」

「説明している時間はない。俺の言つとおりにしろ。」

おかしい、おかしすぎる。ウチの知っている吉井はこんな人じゃない。

「吉井!言っている事が無茶苦茶だ。悪いが俺は協力できない!」

須川君がそう言った。すると、吉井が須川に近づき・・・

バキイッ!

「ぐはぁっ!」

須川を思い切り殴った。ウソ……!?

「してくれと言っているんじゃない。しろと言っているんだ。」

「ちょっと吉井! ホントにどうしたの!? おかしいわよ!」

気が付いたら、そう言っていた。

すると吉井が振り返った。目は、全てを凍らせるように冷たかった。違う、吉井はこんな目じゃない。もっと、優しく暖かい目をしている。

「言っとくが、今の俺にお前を殴らない自信はない。」

「ッ………ウチは何をすればいいの?」

今逆らったら、何をするか分からない。

「話が分かって助かる。俺と戦え。」

もうウチには何が何だか分からない……。
どうしちゃったの吉井!

SIDE……明久?

俺達は今、Dクラスの教室にいる。
教室には英語の遠藤が立会人である。

「……本当にやるのですか？」

「……しつこいヤツだ。何度目だ。」

「何度言えばいい。やるといったらやる。」

向かい側には島田がいる。あれから静かに従っている。ほかのバカと違い話が分かるやつだ。

「分かりました。喧嘩をするのもお互いを知るために必要かもしれないですね。」

許可が出たようだ。

二人そろい

「「サモン試獣召喚ッ！」」

いつものように召喚獣を喚びだす。すると、島田が、

「な、なに。あなたの召喚獣、前と全然違うじゃない……。」

俺の召喚獣を見ると、姿は変わらないが全身から黒いオーラが出ている、木刀からも赤紫のオーラが出ていた。

「気にするな。始めるぞ、時間がない。」

時間に遅れると全てが狂う。

「行くぞ！」

壁を背にしている島田の召喚獣に殴りかかる。

ドンッ！

モーションが大きいため相手に簡単に避けられた。
そして壁に拳が当たり、フィードバックで痛みが来る。

「っ！」

だが、痛みなんか今は無視だ。

あのクソ野郎を殺すまではなッ！

第35問 完全暴走と困惑と殺意（後書き）

W「やべっ、完全に明久壊れてしまった（汗）」

やりすぎたと思っっている作者です。

でも後悔はしてない！

次回辺りでBクラス戦も終わりにしようかと思っってます。」

次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます！

第36問 破壊と終結と膨れ上がる殺意

SIDE・・・将人

「うっ・・・。」

朦朧とした中、俺は目を覚ました。

すると、まず目に入ってくるのは完全にイッてしまった奴らの姿だった。

「う・・・やっと、鬼の補習が嫌がれる理由が分かった・・・。」

「

と言って、再び机に突っ伏す。

その時、色々な武術を練習している内についた気配を察知する能力が

「ッ!!」

背筋が凍るように冷たく、ドス黒くドロドロとした邪悪な気配を感じた。

「これは・・・あの時感じたモノ!? 誰だ?

激しい怒りでココロが歪みすぎて分からない・・・。」

そのお陰で、朦朧としていた意識が一気に覚醒した。

「・・・似ている。・・・あの時の俺と・・・誰かが

悲しむ、

そして俺と同じになる・・・。」

このままじゃ・・・誰かが望まない暴力を振るう。
俺と同じ事を繰り返してしまう・・・。

意識は完全に覚醒し俺は試召戦争が終わるまで、
イライラとしながら待っていた。

S I D E・・・雄二

俺は今、Bクラスの教室の前にいる。
これも作戦の一環だ。

「まったく、人の教室の前に集まりやがって、暑苦しいことこの上な
いつての。」

根本の声が聞こえた。バカめ、それが作戦なんだよ。
さて、すこし挑発してやるか。

「何だ、軟弱なBクラス代表様はもうギブアップか？」

「はあ？ギブアップすんのはお前らだろ。頼み綱の姫路さんも調
子悪そうだしな。」

ニヤニヤと下品な笑みを浮かべる根本。

そうか、奴が明久を豹変させた原因か・・・。

「（そうやって、笑っていられるのも今の内だぜ・・・。）」

明久、作戦開始まで時間がないぞ。

S I D E・・・明久？

「クソがアアッ!!」

四回目の攻撃、壁はかなり崩れている。

『ドンドンうるせえな。何だ?』

『卑怯者のお前に対する嫌がらせじゃないのか?』

『口だけは達者だな。・・・しかし、暑いな、エアコン効いてんのか?』

おい、窓全部あける。あと、目障りなFクラスの奴らも押し返してしまえ。』

壁越しにでもクソ野郎の声が聞こえた。

・・・やってやる、渾身の一撃を食らわしてやる・・・!!

「島田、どけ、邪魔だ。」

島田が退き、壁の前に立つ。

「うおおおおおっ!!」

ドゴオッ!!

崩れかかっていた壁が完全に崩壊した。
そして、見えた、奴の姿が・・・。

「……よう根本、色々としてくれたな。覚悟は出来てんの
だろうな。」

「な、何だその召喚獣はッ!? そ、それに何だ、
点数が表示されてないじゃないか!？」

上を見ると本当なら点数が表示されるところがテレビの砂嵐みた
いに

ザーザーと音を出していて、肝心の点数どころか名前すら出ていな
かった。

だが、今はどうでもいい……

「覚悟はいいか？」

「ちっ、近衛部隊、奴を倒せ！」

数人の生徒が明久を囲み召喚獣を喚びだした。

「雑魚に用は無い！」

すると、俺のの召喚獣から真っ黒のオーラが激しく吹き出し、
囲んでいた召喚獣を召喚範囲から召喚者ごと吹き飛ばした。

「なっ!？」

奴は俺のの異常さを見て、ジリジリと後退していった。
すると、窓から、

「……Fクラス、土屋康太。」

Bクラス代表に保健体育勝負を申し込む……。

Fクラス 土屋康太 保健体育 441点

VS

Bクラス 根元恭二 保健体育 203点

ムツツリの召喚獣が一閃し、Bクラス戦が終結した。

だが、まだまだ、奴にはこの世の地獄を見せてやる！

二度と人前に出られないようにしてやる！

永遠に苦しみと恐怖から抜け出せないようにしてやる！

S I D E・・・将人

『試召戦争、終結！ 勝者、Fクラス！』

アナウンスが聞こえた。

俺は、転がるように補習室を飛び出し、Bクラスに急いだ。

あの気配はBクラスから出ている。

しかも、気配のドス黒さが増している。

「（早く早く早く！）」

第36問 破壊と終結と膨れ上がる殺意（後書き）

W「いやあゝ。大変なことになってきたね。」

将「今はそれどころじゃない！急がねば！！」

W「おゝい。って早いな、走るの。」

次の話で明久を元に戻すつもりですので、今回はこれにて。

次回をお楽しみに！感想をお待ちしてます。」

第37問 復活とみんなの思いと疑問

SIDE・・・雄二

根本を倒し、Bクラス戦が終わったと思われたが、
とんでもない事が起きた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久が無言で根本に詰め寄って、

バキイイツ！

「ぐふあっ！」

根本を殴った。それだけではない、

バキイ、ドゴツ、ガスガスッ！

何度も殴っている、流石にこれはやり過ぎだ！

「やめる明久！ いくらなんでもやり過ぎだ！

ムツツリーニ、秀吉、明久を抑える！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・了解！」

「分かったのじゃ、明久、やめるのじゃ！」

「離せ！俺は、俺は、コイツを殺さない気が、済まないんだッ！」

明久は振り払おうと必死に暴れる。クソッ、なんて力だ。明久の奴、こんなに力あったか？

「邪魔を、するな！」

俺たちを振り払うと、再び根本に向かう。根本の奴は気絶している。

また、殴ろうとした時、

「止めて下さい、吉井君！」

「やめなさい、吉井！」

「明久君、ダメっ！」

「やり過ぎよ、明久君！」

島田、姫路、葵、香奈が、普段からは考えられないような大きな声で叫んでいた。

「どうしちゃたんですか、吉井君……吉井君らしくありませんっ……。」

「吉井、あんた本当におかしいわよ。いい加減目を覚ましなさいっ！」

「明久君、瑞希ちゃんの為に怒ってくれてのはいいけど、それじゃ明久君が悪者になっちゃっ。」

「大切な人の為に戦ったのでしょ、その大切な人を悲しませたらダメだよ……。」

四人がそれぞれの思いを言った時、異変が起きた。

「ひ、姫路、さん……島田さん……葵……香奈……ウウウツツ！」

明久が頭を抱えて苦しみだし、いつもの口調になりつつあった。

「明久、怒りのあまり我を失うなんて、お前らしくないぞ！」

「そうじゃ、お主は、そんなに気が弱かったのか？」

「……男として情けない……。」

気付いたら、俺たち三人も明久に言葉を言っていた。

すると、他のFクラスの面々も同じような言葉をかけていた。

「雄……二、秀吉……ムツツリー……二、み……んな……ううああ……。」

元に戻るのかと思ったとき、

「う、うるせえ。黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れええええ！」

明久とは別の、さっきまでの声が聞こえた。

また戻るのかと思ったとき、

「明久アアアツ！」

聞き慣れた声と共に将人が現れ、明久の腹部に拳を叩き込んだ。明久は倒れ間際に「同類が……。」と呟いていた。同類？ 将人、知っている事全部話してもらおうぞ。

第37問 復活とみんなの思いと疑問（後書き）

W「今回は完全雄ニSIDEでした。

今はちよつと話せる様子じゃないので、こちらへんで、

次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてまゝす！」

第38問 目覚めと事実と一歩前進

SIDE・・・明久

「う・・・・・・・・うん・・・あれ？僕は何を・・・・・・・・。」

「吉井君！？大丈夫ですか!？」

「吉井！ 体はおかしくない!？」

目を覚ますと、Fクラスの教室にいて姫路さんと島田さんが物凄
い勢いで聞いてきた。

二人とも目に涙を浮かべている。え、えーっと・・・・・・・・。

「大丈夫だから、涙を拭いて・・・・・・・・それより何があったの？」

「それはね、明久君がおかしくなって暴れたんだよ。」

葵がそう言ってきた。僕が？ 何にも覚えて無いんだけど・・・・・・・・。

「しかも、瑞希ちゃんや島田さんに少しキツく当たったの。」

だから、泣いていたのかな。嫌われるな、僕・・・・・・・・。

「ごめん二人とも・・・・・・・・ひどい事を言って。何か僕にできる事は
無いかな？」

何かで償わないと気が済まないんだ。」

「そ、それなら、ウチのこと『美波』って呼んでくれる？
うちは吉井の事『アキ』って呼ぶけど……。」

「わ、私も『瑞希』って呼んでくれますか？ 吉井君のことは
『明久君』って呼ばせてください。」

「い、いいけど。何か恥ずかしいな。下の名前で呼ぶって……。
ちゃんと呼べるまで少し時間が掛かるかもしれないけど……。」

そう言うと二人は顔を赤くして目を逸らした。多分、僕もだろう。
葵と香奈は後ろでヒソヒソと「一歩前進したね」「どっちもかンば
れ」と言っていた。

「あれ？ みんなは？ それよりBクラス戦はどうなったの？」

「雄二君と秀吉君、康太君は廊下でお兄ちゃんと話してるよ。他の
みんなは

根本君にBクラスの設備を交換しない条件で女装させてAクラスに
宣戦布告させに行ったり
撮影会とかしてるよ。」

そうか、ざまあみる。ひめじ、じゃ無かった、瑞希さんの手紙を
奪った罰だ。手紙？

「あっ、そういえば手がむぐう!？」

記憶が途切れる前にしようとしてた事を思い出し、言おうとした
ら香奈に

口を手で塞がれ小声で言ってきた。

「（言わなくても分かってるよ。手紙でしょ？ あれならもう瑞希ちゃんに渡したよ。）」

「（ありがとう。）」

小声でお礼を言うと、ドアが開き雄二達が戻ってきた。なぜか、みんなの顔が暗い。すると雄二が口を開いた。

「明久、将人から詳しい説明がある。」

そして、将人が前に来て衝撃的なことを言った。

S I D E . . . 将人

俺、雄二、秀吉、康太は今、廊下にいる。さっきまでの明久の状態を説明するためだ。

「いいか。これから言うことは冗談でも脅しでもない。心して聞いてくれ。」

そう言うと、三人は無言で頷いた。

「まず、明久がおかしくなったのは怒りのせいだ。」

「怒りのせいじゃと？それにしてもあまりにも豹変しすぎじゃと思っ
うのじゃが……。」

確かに、普通に怒るだけなら、我を忘れる位だが、アレは違う。

「違うんだ。アレは怒りで生まれた負の人格……つまり負の感情の塊で出来た」

もう一人の自分に意識、体に乗っ取られたんだ。」

「……なんだと（じゃと）！」「」

信じれないだろうが、事実だ。と言うと三人は黙り込んだ。すると康太が質問してきた。

「それなら、俺たちも、ああなる可能性はあるのか？」

「度合いにもよるし、本人の自我の強さにもよるが無いとは言い切れない。」

今度は秀吉が聞いてきた。

「もし、なってしまったらどうすればいいのじゃ？」

「一番は気絶させる。だけど、取り込まれすぎると最悪、元に戻らない。」

最悪の場合の事を聞いて、二人は青ざめた。すると、黙って聞いていた雄二が口を開いた。

「やけに詳しいな。まるで、知っているかのように……。」

「まあな。俺の周りでごうなつた奴がいるから……。」

「ほう……。」

事実だ。かなり身近な人がああった。

「それじゃ、戻って明久に説明するか……。」

そう言って教室に戻った。

第38問 目覚めと事実と一歩前進（後書き）

W「ふうん。色々、話したんだね。」

将「いずれ伝えるつもりだったんだ。別にいいだろう?。」

W「それにしても、前例の部分、上手く誤魔化したね。」

将「・・・・・・・・・・」

W「はいはい。そこらは何も言いません。では、いっちょ、」

将&W「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝす！」

第39問 説明と影と不安

SIDE・・・将人

「・・・・・・・・と言う訳だ。理解できたか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室に戻り、雄二達に話した事を一通り明久や瑞希さん、島田、葵、香奈に説明した。やはり全員、受け入れられないみたいだ。

「つまり・・・・・・・・僕はもう一人の僕に押っ取られていたって事？」

「そう言うことだ。心配なのは、まだそいつがいるかが分からないって事だ。

明久、体、と言うより体の中に変な感じはないか？」

「・・・・・・・・よく分からない。もしそいつがいたらどうなるの？」

「また同じような状態になる、かもしれない。」

明久は「どうしよう・・・。」と言っている。正直、そいつがいるならば

早急に消さないと大変な事になる。

「心配するな、自分を強く保てば出て来ない。」

「本当？」

「この大事な時に嘘なんかつくか。」と言えば、明久は安心した表情になった。

「さて、話が一段落したところで明久、俺らが教室にいない間に何があつたんだ？」

姫路や島田から幸せオーラのものが出ているが？」

話を終えると雄二がニヤニヤしながら聞いてきた。

確かに、二人からは幸せそうなオーラが微かに出ている。

「え、えっと、何でだろうね……？」

鈍感、としか言えないな。これは……。

「まあいい。明日はいよいよAクラス戦だ。今日はさっさと帰って明日に備えろよ。」

何かを確信した顔で雄二が言い、今日は解散となった。

家に帰り、夕食などを済ませて部屋で勉強をしていると、コンコン、と部屋のドアをノックする音が聞こえ、開けると香奈と葵が立っていた。

「どうしたんだ？」

「ちょっと聞きたい事があるの。」

そう言う二人の顔は暗い。・・・聞かれる内容は大体分かった。二人を部屋に入れ、座らせるとすぐに質問が始まった。

「お兄ちゃん。明久君がおかしくなった原因を話したけど、何でそんなに詳しいの？」

「それは、俺の周りにそうなったやつがいたからだ。」

そう答えると、今度は香奈が聞いてきた。

「それが、ここに来る事になった理由なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言われて、言葉が続かない俺。

「ごめんね。こんな事を聞いて、私たちが聞きたかったのは、何で急に、ここに行っちゃったのかを知りたかったの。それで今日、明久君の原因を

詳しく話していたから、何か関係があるのかなって思ったの。」

「ごめんお兄ちゃん。どうしても聞きたくて・・・。また私たちを置いて急にどこかに行っちゃうのかと思って・・・。ぐすつ。」

俺の知らないところではそんな風に思っていたのか・・・。二人にそんな寂しい思いをさせていたのか・・・。

「ごめんな二人とも。寂しい思いをさせて、ここに来た理由は話せない。」

「ただ俺はもう二人を置いてく事はしないから。」

そう言うと、二人を抱き締めた。

「もう、絶対に置いて行かないで……………」

「お兄ちゃん、ずっと一緒にいて…………ふええええええええええん！」

その後、数分間、ずっと抱き締めていた。

「ふう……………」

その後、二人は部屋に戻った。

そして、ここに来る事になった元凶と話をしていた。

(よう。見ているこっちが恥ずかしくなる時間は終わったのか?)

「(ああ。それより、明久の影…………あれについてお前はどの思う?)」

(ハッ！ あんなお前の一撃や周りの友人ヅラした奴らの声程度で存在が揺らぐ奴なんか興味ねえよ。第一、奴は消えちまったしな。)

「そうか奴は消えてくれたのか……………」

(まあ、しかし混じり気の少ない純度の高い負だった事ってだけは残念だったな。

あのまま存在を保てたらいい仲間になったのにな。(

「(テメエ・・・明久にまで俺と同じ苦しみを与えさせる気が！あゝの苦しみを味わうのは俺一人で十分だッ！)」

(どうだか・・・。まあせいぜい気を付けるんだな。俺の力は大分溜まっている。

しかも、どっかの誰かさんが消した奴の力の一部を取れたからもうすぐ出られるしな。(

「(ツー！)」

(じゃあな。今度出てくる時は、お前の本性を明かしてやる。お前は本当のココロは・・・)

「(言うなアツ！ お前もいつか消してやる！)」

(おゝ、怖い怖い。そんじゃ、さっさと帰るぜ。(

そう言っつて、アイツは消えていった。

俺は、明日のAクラス戦が不安になった。

第39問 説明と影と不安（後書き）

W「このリア充がッ！」

将「作者がリア充じゃないからって俺に八つ当たりすんな！」

W「まっいいや。どうせ次の話くらいで大変な目に遭うから。」

将「そ、それはどういった事で・・・（ガクガク）」

W「さあ？ ってな訳で次回をお楽しみに！」

将「さあ、って・・・あつ、感想をお待ちします。

おい作者！俺を無視して帰ろうとすんな！」

第40問 代表対策と関係と危機

SIDE・・・将人

Aクラス戦当日、恐らく最後になるであろうFクラスの教室で作戦の説明を受けていた。

「説明の前に礼を言わせてくれ。ここまで来たのは、皆の協力があつたからだ。」

感謝する。」

「ど、どうしたの雄二。らしくないよ？」

「自分でもそう思っている。だが、これは嘘の無い本当の気持ちだ。」

雄二の言葉に、嬉しくなったのか教室全体が静かになった。

「ここまで来たんだ、絶対にAクラスに勝つぞ！勉強だけが全てじゃないことを教えてやるぞ！」

「」「うおおおおおー！」「」

最後の戦いを前に雄二が宣言した。

「そこで、Aクラス戦は一騎打ちで決着をつけたいと思ってる。」

『どつという事だ？』

『そんなことをして勝てるのか？』

『誰が誰と一騎打ちするんだ？』

知らない人にとっては驚くだろう……。

ざわめきが広がった。雄二は教卓を叩き、静まらせた。

「落ち着いてくれ、今説明する。やるのは当然……俺と翔子だ。」

すると、香奈が手を挙げて質問した。

「雄二君、勝てるの？聞いた話だと、瑞希ちゃんより点数が高いらしいけど……。」

「確かに、あいつはかなり強い。まともにもやりあっても勝てるわけが無い。」

おいおい。その言い方はないだろう？

「だが、ここまでそのような状況をいくつも越えてきただろう？今回も同じだ。」

俺たちが絶対に勝つ。」

ここまで勝利に導いてきた雄二だ。だれも否定する気はない。

「さて、具体的な内容だが……。フィールドを限定して行っ。」

「教科は何のなの？」

「教科は、日本史だ。内容も限定し小学生レベルで行い、召喚獣バトルではなくテストを用いた純粋な点数勝負とする。」

小学生レベルなら、延長戦がずっと続いてしまうぞ？

「大丈夫だ、翔子はある問題を出されると必ず間違える。」

「何だ？翔子が間違えるような小学生の問題なんかあるのか？」

少なくとも、俺の記憶には無い。

「それは・・・『大化の改新』だ。」

「誰が何をしたかって事？ そんな問題出てきたっけ？」

「いや、もつと単純だ。」

「何年に起きたか。とでもいつのかのう？」

「ビンゴだ秀吉。起きたのは645年だ。こんなの明久でも答えられる。」

明久。なんで目を逸らす？

「あの、気になったのですけど。坂本君は霧島さんと仲がいいのですか？」

俺は知っている。雄二は幼馴染だ。そして・・・翔子はずっと雄二のことを

想っている事も……。何度かそれについて相談を受けた。まあ、相手に思いを伝えられないのは俺も同じだからな。

「アイツとは……。幼馴染だ。」

「総員、狙ええっ!!」

「な、なぜ明久の号令で上履きを構える!?
そんな事を言ったら将人だって友達の関係だぞっ!!」

あつ、この野郎! 俺まで巻き添えにする気か!?

「へえ、将人君。その翔子って女の子と仲いいんだ……。」

「お兄ちゃん。ちょくつとこつちに来てくれる?」

ふ、二人から黒いオーラが……。

明久も瑞希さんと島田……。じゃなかった美波に襲われている。

(明久が呼び方を変えたので俺も変えた。)

「ちょ、誤解だ! 翔子とはただの友達で……。」

「「言いたい事はそれだけ?」」

ヒイイツ! こ、殺される!

「皆の衆、落ち着くのじゃ。」

おお、秀吉助かったぜ……。

「秀吉は憎くないの？」

「冷静になるのじゃ。相手はあの霧島翔子じゃぞ？
男に興味があるとは思えんじやろつが。」

「はあ？何を言っているんだ？」

「むしろ、興味があるとすれば……。」

「……。」

全員の視線が、瑞希さんとなぜか香奈に向けられる。

「えつと……何かしましたか？」

「なんでみんな私を見てるの？」

「ゴメン。俺もよく分からん。」

「とにかく。俺はあいつに昔、嘘を教えた。あいつは教えた事を絶対に忘れない。
それを利用して勝つ。」

「卑怯臭いと言わないでおう。」

「俺たちが目指すのはシステムデスクだ！」

第40問 代表対策と関係と危機（後書き）

W「PCが変わってから初の投稿だぜ！」

将「やけに時間かかったような気がするんだが……。」

W「なかなか慣れなくてね、少し手間取った。」

将「そうかそうか。なら更新スピードもアップだな。」

W「……………（遠い目）」

将「作者？」

W「多分、アップ……するかな……？」

将「心配だな……。」

W「とにかく、いつものを……せーの」

W&将「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝす！」

第41問 学園長と将人と暗い過去

SIDE・・・将人

みんながAクラスに宣戦布告に行っている頃、俺は、学園長室に呼び出されていた。

「さて、何でアンタに来てもらったか、分かるかね。」

そうやってきたのは、この学園の長、藤堂カヲルだ。

「さあ？俺は呼び出されるような事はして無い気がしますが？」

「確かに、アンタは何もしていない。だが、観察処分者の吉井明久が起こしたこの行動には、少なくともアンタが絡んでいるはずだ。」

そう言って、見せたパソコンには、明らかに様子のおかしい召喚獣と

同じようにようすのおかしい男子生徒が映っていた。

「ッー！」

その事が。

確かに明久の豹変した原因を俺は知っている。

そして、学園長も俺が、ここへ来た理由も…………。

「…………いいでしょう。知っていることを全部話します。

ただし、この学園にいる全ての生徒、教師には絶対に言わないことが条件です。」

破った場合、現伊達家当主として、この学園の資金援助を打ち切らせてもらいます。」

「いいさね。では、知っていることを全部話しな。」

学園長は承諾し、俺は知っていることを全部話した。

「まず、俺がここに来た理由は、俺の祖父……伊達厳冬けんとうから聞いてますよね？」

「ああ。アンタは、今のアンタの立場、伊達家当主になる候補者の中から、

当主になる人物が決まってるから、アンタの母親……伊達文子ふみこから生まれたんだらう。」

しかも、アンタは本家の者だから、生まれた瞬間にアンタは当主になっていた。」

「はい、そして当主になるはずだった男は、その座を簡単に奪っていった俺を恨み、憎しみだし、俺の亡き者にしようとあらゆる方法で俺を殺そうとした。」

「そして、アンタの父親……伊達修おさむに、身の安全と傷を治す目的でここに行かされた。だらう？」

俺の過去を二人で説明し、本題に入った。

「その時の状態が、この映像の中の明久と同じ状態です。」

「なぜこんな風になったのかね？」

「恐らく、激しい怒りや悲しみなどの負の感情が観察処分者の特徴である」

フィードバックを逆に通じてなったのだと思います。」

「ふむ……つまり、変異したのは『召喚者の心理状態が関係している』」

と言うことなのかね？」

「あの時、明久は明らかに別人格に体に乗っ取られていました。そう考えるのが妥当でしょう。」

あの明久が豹変した原因を分かっている範囲で全て話すと、学園長は『フム……』と考え込みだした。

「大丈夫なのかね？」

「まあ、難しいですけど、負の感情を多く出さなければ良いだけのことです。」

あいつなら、きっと……」

「いや、心配しているのはアンタのほうさね。」

俺の、心配？

「知らない訳がないさね。お前も吉井明久と同じ、いやそれより酷い状態なのを。」

「……………」

言葉が無い。確かに、今の俺がああならないとは言い切れない。

「これは援助してもらってる側からの心配でもあるし、遠いとはいえ親戚筋なんだ。

心配しないわけがない。……………気をつけるんだよ?」

「……………ご心配ありがとうございます。大丈夫です。

俺自身との決着はいずれ着けますし、俺をこんな風にしたあの男との決着も着けますから。」

と言い、俺は学園長室を後にした。

第41問 学園長と将人と暗い過去（後書き）

W「うわあゝ。醜い骨肉の争いだよ……。」

将「だから文月に来たんだ。」

W「でも、その地位を狙う奴との決着つて着いて無いんだよね。

まだ自分との決着すら着いて無いのに。」

将「いずれ着けるさ。作者に言われずとも……。」

W「……さて、話がこれ以上暗くならないうちに、いつものを……。」

W & 将「次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます！」

第42問 決戦前と秘密と取り巻く闇

SIDE・・・明久

Aクラスに宣戦布告して、Fクラスに戻ってくると
学園長室に行ってたマサがいた。

「おつ。やっと戻ってきたな。で、何時始まるんだ？」

「十時からだよ。って、それよりも大変なんだ！」

「何が？」

僕は霧島さんが言ってた、『負けた方は何でも言うことを聞く』
と言う

条件を言い、瑞希さんの人生と貞操の危機だと言うことを教えた。

「……………何を言ってるんだ？俺が知っている限りでは翔子
にそんな趣味は無いし、
ちゃんと男子に興味は持ってるぞ？」

「えっ、でも、今までにたくさん男子生徒が告白して、全部断つ
たんだよ？」

「当たり前だ、昔から好きな人がいるのに他の男子なんかと付き合
うか普通？」

えっ、ちょっと初耳なんですけど!？

「誰なの？霧島さんが昔から好きな人って!？」

「人の秘密を簡単に言えるか。その内分かるだろうさ。」

と言つて、この話を打ち切つた。うん。誰なんだろう？

「宣戦布告で他に大切なことは？」

「うん？ああ、もう無いよ。後は待つだけ。それよりも、学園長室で何を話してたの？」

ついでに言うと、それも気になる

。マサはあんな所に呼ばれるような行いはしない筈……。

「ああ、それは、お前がブチ破つた壁の修理費を学園の予算から引いたつて、

スポンサーである俺に報告しただけだ。」

「う……それもう知れ渡つてるんだ……つて、えっ！マサつてスポンサーなの？」

「ああ。言つてなかったな。俺が振り分け試験にいなかったの言うのは、俺の家、

伊達家の当主の権限を俺に譲る式に出ていたからなんだ。」

「それつて凄くない!？」

凄すぎ。伊達家つて、かなり大きな家だし、一族の数も相当な数だ、

それをまとめるんだ。高校生で。それを凄いと言わずにはいけない

よ。

「……そのせいで俺は、色々なもの失ったんだがな……」

「えっ、何か言った？」

「何でもない。」

マサが何か呟いたような気がしたけど気のせいだったみたいだ。

SIDE・・・将人

やはり明久には言わない方がいい。

伊達家の現状、権力争い、今は目立った活動は無い俺を狙う反対勢力、

その勢力の裏で行われている犯罪。などと、言い出したらきりが無い。

だからと言って、誰かに手を借りるのも嫌だ。巻き込みたくない。何より傷ついてほしくない。

この件は、俺だけで片付けたい。親父にも頼りたくない。

親父はそんな醜く汚い争いに俺を巻き込みたくなかったのだろう……

だから文月（ぶんづき）に行かせた。

そのお陰で、明久たちとも出会えた。

だが、いずれ俺を狙って反対勢力はここに来るだろう。

そうなれば、誰かが巻き込まれる可能性がある。

その被害を最小限に留めるためにも一人で解決するしかない。

大切な親友、クラスメイト、想い人、妹達は絶対に守りたい……

第42問 決戦前と秘密と取り巻く闇（後書き）

W「相変わらず、闇が付き纏ってるね。」

将「ほつとけ、言ったはずだ、決着はつけると。」

W「・・・そろそろ影が動く頃かな？」

将「マジでかつ!?!?」

W「ちよ〜っと、キツイ事になるけど頑張ってね。」

将「いいだろう……。そのまま決着を着けてやる。」

W「がんばってね〜。それじゃあ、いつものを……………」

W&将「次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてま〜す!」「」

第43問 死刑宣告と恐怖と謝罪の仕方。

約束の10時が刻々と迫ってきているとき、秀吉が話しかけてきた。

「のう、将人よ……頼みがあるのじゃが……。」

「ん？何だ？」

「実はの、Cクラスでのことを覚えておるかのう？」

ああ、雄二と半分怒っていた俺が起こした小山に挑発した事のことか。

それがどうしたんだろうか。どうも歯切れが悪い。

「じ、実はな、そのことが姉上に知られてしまったの、宣戦布告から帰る間に」

『秀吉、後でOHANASHIしようね(ニ)ニ(ニ)』と言われてしまったのじゃ……。」

うんうん。それで？

「ワシは一番最初に戦うんじゃが……恐らく姉上も一番初めに来て……(ガクガク)」

「つ、つまり……？」

「今日、ワシは生きて帰れるのかが分からないのじゃ(ガクガク)」
(涙目)

あのことが本人に知られたのか……それで本人はかーなり怒っているよ。

これは何とかしないと。これ以上秀吉の涙目状態を見てると仕掛けた俺たちが罪悪感で潰れる。

「マサ、何してるのって、何で秀吉が泣いてるの!？」

「どーしたの? 秀吉君……って何で泣いてるの!？」

「まさか、将人君、秀吉君を……。」

「明久に葵、香奈、違っのじゃ……実はの……。」

秀吉は前に行った作戦のせいで姉の木下優子さんが怒っていること、

もしかしたら、今日が自分の命日になってしまいかも知れないことを教えた。

「な、なるほど……。それは怖かったよね、よしよし(ナデナデ)」

「うう……。グスツ……。本当に怖かったのじゃ……。」

秀吉は説明中に怖さのあまり泣き出してしまったので、現在、葵が頭を撫でてあげて落ち着かせている。

周りからは、羨望の視線と、康太が静かにシャッターを切る音が聞こえた。

「それで、マサはどうする気なの?」

「うん。それは、あれは俺が計画したことだから、怒るなら俺にしてくれって」

素直に言うのが良いと思っている。あとは、優子さんと戦って、向こうが負けたら秀吉に怒るのはナシ、勝ったら俺に怒れって感じで頼もうと思う。」

「ふうん、随分優しいんだね・・・。」

なんで香奈が不機嫌になるんだ？

「あゝ、それはだな、クラスメイトとして、友人として助けるんだ。もちろん、香奈たちだってそれくらい大事に思っているよ。」

「嬉しい／＼／＼／＼」

「仲良いねえ。」

「…………ちつ…………」「…………」

今、周りから微かな殺気と盛大な舌打ちが聞こえたぞ。

「イチャつきやがって……」「坂本と言いきいつと言い、美人の幼馴染を持つてる奴が」

二人もいるんだ……」「しかも、姫路と島田は吉井と特に仲が良いらしいし…………」

「…………畜生…………。」「…………」

お前らはどんだけ女子に飢えてるんだ!?

言っとくが、俺と香奈は彼女と彼氏の関係じゃないからな!

まだ告ってないんだから……（泣）

「んじゃ、雄二に報告して来る。」

と言つて、俺は雄二の所に行き、秀吉に代わり俺が出ることを伝えた。

「……大丈夫なのか？前みたいに勝手な行動はナシだからな。」

「大丈夫だ……恐らく。それで、他のメンバーは誰なんだ？」

「お前の次に、明久、その次に姫路、そして俺だ。」

なるほど、明久が出るのか。

「葵と香奈のどちらを出そうか迷ったんだが、操作に慣れていないし点数も敵と同等だからここは明久に出してもらおう。」

「りょくかい。」

そうして、後は待つだけとなった。

時計を見ると、あと、2〜3分で10時だった。

この待ち時間が、今の俺にはとても不愉快に感じた。

……心配だ。たぶん、アイツの力が大きくなっている影響だと思ふ。

好戦的になってきている。

とにかく、優子さんに条件を言つて、精一杯戦うだけだ。

第43問 死刑宣告と恐怖と謝罪の仕方。(後書き)

W「へえ」。幼馴染の前で秀吉を口説くんだ。」

将「何で秀吉を口説くんだ！男だぞ！」

W「まあ、そんなことは置いて。次回はいよいよAクラス戦です！」

将「思えば、結構長い道のりだったな。」

W「そう言うことで、それじゃ、いつものように、」

W & 将「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝです！」

第44問 Aクラス戦と接戦と主導権剥奪

SIDE・・・将人

「では、両者共準備は良いですか？」

約束の10時になり、俺たちは今、Aクラスにいる。

改めてみると、やっぱり、Aクラスの設備は凄いな・・・。

Fクラスと比べると、雲泥の差ということわざがぴったり当てはまるな。

しかも、担任は憧れの高橋先生、羨ましすぎる・・・。

「では、一番目の人、どうぞ。」

「アタシから行くよ。」

「俺も行くか。」

俺が出ると、優子さんは少し驚いた表情になった。

「・・・伊達さんなんだ。秀吉、後で覚悟してなさいよ・・・。」

「

「あゝ。そのことでなんだが・・・。」

「何よ？」

「あれって、実は俺が考えた事で、秀吉には無理矢理やってもらったんだ。」

少し事実を曲げて、優子さんに説明する。

「……………それで？」

「そこで、この勝負にそっちが勝ったら俺に拷問するなり
紐無しバンジーさせるなり好きにしてい、ただし、俺が勝ったら、
秀吉に怒るのは
無しにしてくれないか？」

「……………。」

優子さんは、少し考え込んでから、

「いいわ。その条件に乗るわ。」

「えー。両者、話し合いが終了したみたいなので。教科は何にしま
すか？」

高橋先生が優子さんに聞いた。さあ、何が来る？

「数学でお願いします。」

よし、苦手科目じゃない。いける。

「では、召喚してください。」

「「サモン試獣召喚」」

キーワードを言うと、久しぶりに俺の召喚獣が姿を現した。
一方、優子さんの召喚獣は、姿は優子さんに似ているが、鎧をまとい、
身長に不釣り合いな大型のランスを持っていた。

Aクラス 木下優子 数学 436点

VS

Fクラス 伊達将人 数学 442点

周りからは驚きの声上がる。

「流石ね。学年主席になった実力は本物ってわけね。」

「そっちこそ、ほとんど俺と変わらないじゃねえか。」

そう言うと、俺と優子さんはお互いに武器を構えた。そして、

バツ！ ガギンツ！！

同時に駆け出し攻撃に移った。

ランスとこちらの刀がぶつかり合い大きな金属音が響く。

「はっ！」

短い気合とともに、鏝迫り合い中の相手のランスを払い切りかかる。
る。

しかし、払われた瞬間、すぐに距離をとって離れたため攻撃は外れてしまった。

すぐにとった距離を詰めて、突きを繰り出してきた。

俺はそれを刀で防ぎつつ距離をとった。

「（なんて切り替えが早いんだ……。こんなに強い奴初めてだ……。）」

「（流石、ただ点数が高いだけじゃないみたいね……。気を抜いたら一瞬で負けるわ……。）」

すると、かなりの速さでランスを構えて突進してきた。ランスの先が当たる瞬間、横に避けて召喚獣を斬りつけた。

Aクラス 木下優子 数学 403点

30点ぐらい削り取ることができた。

「（いける！このまま押せば！）」

「（くっ、こうなったら……。）」

少し離れたところにいる優子さんの召喚獣が不可解な行動を取った。

ランスの先をこちらに向けた。

「（何をやる気だ？また突進か？）」

すると、ランスがいきなり伸びた。

それも、気が付いたら目の前にあるくらいの速さで、

グサッ！！

「くっ、しまった！！」

完全に避けきれず、召喚獣の腕に刺さってしまった。

Fクラス 伊達将人 数学 401点

40点以上、削られてしまい、点数的には優子さんが上に立ってしまった。

「……………なるほど。召喚獣の腕輪か……………」

「そうよ、能力は『伸縮』。だから、あなたがいくら距離をとってもこちらの攻撃は届くわ。」

「やばいな。こっちはリーチの短い刀だ。相性は最悪だな……………しかも、」

「(さっきの攻防で楽しんでたな、俺……………まだ、大丈夫か……………」

「(ははははっ！何が大丈夫だ！手遅れだ！乗っ取らせてもらう、その身体をッ！…………)」

「(なっ！？やめろおおおッ！！！！！！)」

……………この間、僅か数秒。その数秒間に俺の身体は主導権を奪われた……………

第44問 Aクラス戦と接戦と主導権剥奪（後書き）

W「・・・・・・・・・・・・・・・・（土下座中）」

将「・・・んで、一ヶ月更新できなかった理由は？」

W「テ、テストの勉強に忙しかったからですッ！」

将「ほう……。それじゃあ、それなりの結果が残せたんだよな？」

W「・・・・・・・・・・・・・・・・えっと・・・あはははは・・・・・・・・。」

将「そうか……。ちょっとこっちに來い・・・・（ゴゴゴ）」

W「ひい！！えっと、一ヶ月近く更新をとめてすみませんでした。

今後は、少しずつ更新するペースを上げていきたいです。

今、将人君がご乱心みたいなので今回はここまでです。

じ、次回もお楽しみに！！！」

将「待て作者！！！」

第45問 決着？と入れ替わりと逃走

SIDE・・・優子

「（今は食らったみたいね・・・。）」

わたしの腕輪の能力『伸縮』を食らって、何とか伊達さんの点数を削る事は出来たわね。でも、そんなに点数が減って無いわ・・・。
こんなに強い相手は初めて。

それにしても

「（どうしたのかしら、さっきから俯いて？何をする気なの？）」

すると、伊達さんが顔を上げた。その右目を見たとき、
背筋が凍るような寒気が襲ってきた。

「（な、何？この寒気・・・？というより、さっきから伊達さんを見ると

息がしにくい・・・。何、これ？）」

「・・・勝負つてのは、相手を痛めつけないと面白くねえ・・・。」

伊達さんが何か言ったような気もしたけど、この異常な寒気や息
苦しんで

ほとんど聞こえていなかった。

「さて、出し惜しみは無しだ。俺も本気で行く。」

「くっ……望むところよ！」

今まで本気じゃなかったと言われるとかなり厳しいけど、攻撃範囲はこっちの方が有利なんだから、勝てる。お互いに武器を構えあつた時、

「『予測』開始。」

と、伊達さんが言った。予測？何のことなの？

ダンッ！

すると、伊達さんの召喚獣が一直線に走って突っ込んできた。良いのだわ！

「いただき！」

私は腕輪を使って一気にランスを伸ばした。そして、ランスは伊達さんの召喚獣を刺し貫いた、

はずだった……。

「えっ？」

伊達さんの召喚獣は、紙一重で避けてまたこっちに走ってきた。

「くっ！」

もう一回、ランスで突くがこれも避けられた。

もう、相手は攻撃できる距離にまで詰められてしまった。

伊達さんの召喚獣が刀で攻撃してきた。
私はとっさに防御の姿勢をとったけど、

ザシュッ！

Aクラス 木下優子 数学 371点

防御の弱いところを的確に攻撃されてダメージを負ってしまった。
私は、距離をとった伊達さんに連続で攻撃を浴びせた。
だけど、その攻撃は一撃も当たらず、全て避けられて反撃でダメージを
負うことになってしまった。

「（なんで！？ 何で当たらないの！？）」

攻撃しても当たらない、防御しても食らう。

それどころか、相手が一方的に攻撃し始めた。しかも、痛めつける
ように

わざと手加減しながら。

・・・怖い、一方的にやられるって、こんなに怖いのに・・・
・・・？

Aクラス 木下優子 数学 248点

VS

Fクラス 伊達将人 数学 342点

気がついたら、かなりの点数差ができてしまった。

あれ？ なんで伊達さんの点数が減っているの？

「（『予測』っていうのと関係があるのかしら？）」

「教えてやるうか？」

まるで、わたしの疑問が聞こえたように伊達さんが言ってきた。笑っている。無邪気な笑顔じゃない、邪悪で人を見下したような笑みだわ……。

「俺の召喚獣の能力は『未来予測』。発動すると常に一瞬先の未来が視える。」

つまり、今までの攻撃は既に来ると分かっていたから当たらないんだ。」

「その点数でその能力。反則ね……。」

「相手を痛めつけるには最高の能力だけ、こいつはよお。」

私はゾツとした。相手を痛めつけることを楽しんでいるなんて……。
怖い、ものすごく怖い。

私は圧倒的な力の差に反撃する気を失ってしまった。

「反撃する気も失せたか。さっさと止めを刺すか。」

伊達さんがつまらなさそうに言うと、止めを刺すために刀を振り上げ

わたしの召喚獣を真っ二つに……。

しなかった。

「えっ？」

刀は召喚獣のすぐ横の床に叩きつけられていた。
何でと思っていると、伊達さんが急に頭を抱えて苦しみだした。

「ぐ………がぁ………あううう………ち………ちくしよ
う………こんな時に………うがぁ………」

すると、伊達さんの召喚獣が突然消えた。

「ぐうあああぁっ！はぁっ………はぁっ………はぁっ………はぁっ………」

伊達さんが荒い息をしながら落ち着き始めた。

それと同時にあの寒気や息苦しさがなくなっていった。
すると突然、伊達さんが走って教室から出て行ってしまった。
吉井や伊達さんの妹と白崎さんが後を追って教室を出て行った。

「しよ、勝者はAクラスの木下さんでよろしいです、か？」

「えっ？あ、はい。」

わたしは呆然とするしかなかった。

第45問 決着？と入れ替わりと逃走（後書き）

W「え〜。今回、将人君が現実逃避してしま・・・」

ヒュン！（どこからともなくカッターの刃が飛来）

カッ！（作者の足元に刺さる音）

ダラダラ・・・（作者が変な汗をかく音）

W「嘘です。ちょっと見られたくないところ見られてしまい
びっくりして逃げただけです。

次回には帰ってくるでしょう。・・・帰ってくるよね？
と言うわけで、

次回をお楽しみに！感想をお待ちしてます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8015p/>

バカと独眼と召喚獣

2011年12月11日20時50分発行